
日本台湾学会 ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 36 号

<目次>

特集 台湾研究、この1冊	… 1
学会・シンポジウム等参加記	
第3回台湾研究世界大会 (WCTS)	… 20
学界動向	
日台関係史研究の現状と展望	… 22
学会活動報告	… 24

特 集

台湾研究 この1冊

「必備的巨著」との対話はつづく

呂訴上『台湾電影戲劇史』
(台北：銀華出版、1961 年)

理事長 三澤真美恵 (日本大学)

ヒトは忘れる。大好きな本も、お気に入りの映画も。おかげで、読み返し、見返すたびに、「あれ、こんなセリフあったっけ」、「ん？ こんな役者出てたっけ」という発見がある。俗に「工具書」といわれる辞書、事典、資料集の類であれば、必要

箇所だけ読んでおしまい、ということがほとんど。忘れるまでもなく、読むたびに発見の連続、ということになる。

台湾の映画演劇史に関しては、呂訴上『台湾電影戲劇史』(台北：銀華出版、1961 年)が長い間ほぼ唯一の専門書であった。刊行時広告チラシの「内容」紹介には「明朝末の国性爺合戦から現在にいたる台湾の映画・楽劇・人形劇・影絵その他民族芸能五十五種全般に亘る史料を網羅したもの。本文六一二頁。写真その他の図解六二七。文中で紹介される芸能関係者の数三〇〇〇余。台湾を中心とした中国の映画演劇百科全書ともいえる。台湾芸能を知らんとするものにとって必読の書。(中国白話文で書かれてある)」と日本語で書かれている。

同書は、台湾映画史を研究する私にとって、はじめて手に取った 1990 年代当時から今日にいたるまで、まさに「必備的巨著」(同書奥付)である。特に映画史について書かれた部分は、一行一行線を引くようにして読んだ。それは工具書であり、同時に正典でもあった。

とはいえ、歴史学の方法論を学ぶにつれて、同書の不足不備も次第に目につくようになる。同書を含め先行研究はすべて批判の対象にしなければと思い込んだ時期だったせいもある。だが、すでに 20 世紀が過去になったある時、呂訴上が同書を刊行した時代の困難が忽然と現実感をもって胸に迫ってきた。不足と思われた行間に、言い尽くせない何かの滲みはじめた。

邱坤良『呂訴上』(台北：文建会、2004 年。前掲の『台湾電影戲劇史』広告チラシは本書 128 頁参照)によれば、呂訴上(1915—70 年)は歌仔戲

劇団を経営する両親のもとに生まれ、16歳で同劇団の脚本家兼監督となり、父の援助を得て自ら巡回映画社を組織し当時最年少の弁士としても活躍した。戦時期には皇民劇、戦後には反共抗ソ劇の脚本・演出を多く手がけ、亡くなる数年前からはテレビ放送にも関わった。日本にも数度にわたって留学し、映画、演劇にとどまらず、音楽、腹話術、人形劇など幅広い芸能の知識と実技を学び、後に多くの評論や実用書をものしている。55歳で亡くなった彼の生涯はそのまま台湾芸能史の一断面でもある。

戦後には映画の監督にも挑戦しているが、彼が最も熱を注いだのは台湾語による各種の舞台だったようだ。低俗を理由に禁止されかかった歌仔戲について、政府の関連会議に駆けつけ改良の可能性を主張して保存を図ったと自ら述べている。戦後すぐの時期（1946—50年）には警察に勤務したこともあり、それが各種の公的統計資料を入手できた背景だと推察される。だが、大甲分局分局長の職にあった際、局内で起きた警察官による囚人の過失致死事件の責任をとって辞任している。同事件はもとより、2.28事件を跨ぐ時期に警察官という職にあった以上、行政権力の内幕についても熟知していただろう。

そのことに思いをいたしながら『台湾電影戲劇史』をあらためて読み返すと、戒厳時期に台湾芸能について語るにあたって、いかに慎重に言葉を選んでいくか、その緊張感が前景化してくる。同時に、斜め読みしかしてこなかったが実は同書の過半を占める各種の伝統芸能史には、随所に彼自身の活動の痕跡が記されていることを再確認する。すでに原本が散逸した資料も多く含む同書に「百科全書」的な価値、工具書的な価値があるのはもちろんだが、記載されていない多くの事実が行間にあることも含め、同書は「台湾を中心とした中国の」という文言を冠さなければならない時代に、台湾芸能に情熱を傾けた一人の人間の生命史としても読むことができる。

ヒトは忘れる。だが、忘れるからこそその発見もある。かつて台湾映画史を学び始めた時の不明と興奮を同時に噛み締めつつ、読むたびに違う相貌を見せる「必備の巨著」との対話はつづく。

思い出の一冊

戴國輝『日本人との対話 ——日本・中国 台湾・アジア』 (社会思想社、1971年)

春山明哲

(早稲田大学台湾研究所招聘研究員)

2016年6月30日、韓国^{チュンチョン}春川の翰林大学校日本学研究所で開催されたシンポジウム「帝国日本における植民地主義と知の連鎖」で、共催の国際日本文化研究センターの共同研究グループ（代表松田利彦教授）の一員として報告したことがある。私の選んだテーマは、題して「日本における台湾史研究の一考察——戴國輝と「知」の精神史の観点から」（『翰林日本学』第29号、2016年12月、翰林大学校日本学研究所）であった。

この報告の中で、私が取上げた本が、ほかならぬ標記にある『日本人との対話』である。はじめに、やや長くなって恐縮だが、報告書の一節を引用したい。

戴國輝が自分の「アイデンティティ」をどのように認識していたかを端的に示すものは、彼の著書の奥付頁にある著者略歴である。最初の著書『日本人との対話』には副題として「日本・中国 台湾・アジア」が付されていて、台湾が少し小さい活字で中国に隣接して付いている。あたかも中国大陆と台湾島との地理的關係を示すように、である。発行されたのは1971年8月15日、いうまでもなく「終戦」の日であり、恐らく「指定」された日であろう。さて、著者略歴にこうある。「戴國輝（たい くお ふえい）1931年4月15日中国台湾省中壢に生れる（祖籍は広東省梅県）。「中壢」が「桃園県」となることもあるが、「中国台湾省」という表記は、戴國輝の単行本9冊ですべて一貫している。最初はなにげなく見ていたが、ある時私は妙な感じを受けた。1931年といえば昭和6年で、そのとき台湾は「大日本帝国」の一部であったのだから、戴國輝が「中国台湾省」に生れることは「できなかった」はずである。史実を研究対象とする歴史研究者戴國輝は、ひとたび語りはじめれば日本統治下植民地台湾を「堂々と正面から」押し出すのであるが、「戴國輝とは何者か」を表示するときは、断固として史実を無視して（？）「中国台湾省」を貫くのである。

私がこの本の存在を知ったのは1972年の暮れも近い頃ではなかったかと思う。その頃私は工学

部の大学院で有機化学の実験をやりながら、文学部で伊藤隆先生の歴史の授業を聴講するという「迷える子羊」のような日々を送っていた。田中首相が北京空港に降り立ち、毛沢東・周恩来と握手するシーンを本郷の喫茶店のテレビで見ている、台湾華僑の運命を考えていた。

思想の混沌の中である人が示してくれたのがこの『日本人との対話』である。君の疑問はこの本の内容と関係がありそうだから、進呈するよ、というわけにいただいた本なので、蔵書印が押されている（その人も故人となられた）。

当時市ヶ谷にあったアジア経済研究所の調査研究部に戴國輝さんを訪ねたのは、翌1973年1月末のことである。「日本帝国主義の牙城によこそ」といきなり戴さんから言われて面食らったことを覚えている。私が新橋の華僑総会や中国同学会に出入りしていた（といっても文化大革命初期の1967年までだが）こともバレーしていたらしい。

もっとも私は忘れていたが、東大の山上会議所で新入生として戴さんに挨拶したことがあるそうだ。君のお父さん嬉しそうだったよ、というわけである。アジ研で会った恐らくその日に「霧社事件の共同研究に参加しないか」ぐらいのことを多分言われたのだと思う。その日から1973年の1年間は疾風怒濤のようなものだが、思い出の本から遠くなるので省略する。

今でも不思議なのだが、なぜ戴さんに「入門」したのだろうか。『日本人との対話』を読み返してみても、当時の読み方を再現するのは難しい。ひとつ確かなことは必ずしも「台湾」だけが私の関心ではなかったということである。

この本の内容をごく簡単に紹介すると、第一のパートが「日本とアジア」で、アジア文化会館における戴さんの東南アジア視察旅行報告、田中宏さん（アジア学生文化協会、のち一橋大学教授）との対談（「事実におけるアジアと日本」）、「私の華僑小試論」、第二のパートが、「日本——台湾 中国」で、本書のタイトルと同様、ここでも大きな活字の中国とポイントの小さな台湾が併記されている。このパートには、「日本統治と台湾知識人——某助教授の死と再出発の苦しみ」、「私の発言——台湾研究の姿勢」、そして経済評論家・杉岡碩夫との対談「台湾経済と日本の資本進出」とシンポジウム「中国研究者の造反と自己批判」（マーク・セルダン、幼方直吉、小島麗逸、加藤祐三、戴國輝、波多野宏一）が収められている。そして第三のパートが「アジアから見た日本」で、インド、韓国、パキスタンからの留学生・研究者との座談会となっている。

本書で取扱われているテーマの広さ、表現形式の多様さ、登場人物の国際性など、のちに展開される「戴國輝ワールド」を彷彿させる。そしてまた、中国文化大革命とベトナム戦争にゆれるアジア、高度経済成長期に入った日本という時代の激動が甦ってくる。これだけの問題領域を守備範囲にしている知識人というのは珍しい、と当時の私には思えたのである。そして、なによりも正々堂々の論、という印象が鮮やかであった。もし、戴さんが単なる（というのもおかしいが）台湾史研究者であつたら、果たして扉を叩いたかどうか。とはいえ、霧社事件研究は私にとって最初の歴史研究であり、はじめての研究組織であつた。この思い出についても、最近書く機会があつたので注記しておく。（春山明哲「台湾霧社事件研究とわたし」『my b』新装第6号、2018年10月、特集「古稀のライフワーク」）

台湾史研究との関係と言えば、「日本統治と台湾知識人——某助教授の死と再出発の苦しみ」が印象に強い。本論は最初東京大学中国同学会会誌『暖流』第5号（1964年2月）に掲載された「某助教授の死と再出発の苦しみ」に大幅に加筆し、タイトルを変更したものである。文体といい、多くの歴史事象を濃縮した論の運びといい、近現代の「中国 台湾」関係といい、戴さんならではのものだが、なによりもそのエモーショナルな筆致に圧倒される。

『暖流』創刊号（1960年）に総幹事だった戴さんはパスカルの「人間は考える葦である」というフレーズを引いている。『暖流』第13号（1971年4月）には同学会の歴代総幹事の座談会が掲載されていて、戴國輝のほか、黄昭堂、涂照彦、劉進慶などの名が見える。『暖流』は台湾留学生による台湾史研究の揺籃であつた。

あの震災の前年の2010年、戴さんの奥様の林彩美さんからの依頼で戴國輝の著作のセレクションを編むことになった。2011年4月、戴さん没後10周年の誕生日に、中国語版の全集刊行と同時に日本でも刊行する、というのが目標であつた。当初はそんなに短日月の間に無理ではないかと思つたが、松永正義君とも相談し、この機会を逃したらできない仕事だろう、ということで丸川哲史さん、胎中千鶴さんに手伝ってもらっては始めることにした。

奥様の作成された膨大な日誌、ダンボール一杯のコピー、そして書架や図書館の本など、戴さんの著作を集中的に読んだ。震災による紙不足も心配だったが、版元のみやび出版伊藤さんの奮闘もあり、2011年4月15日『戴國輝著作選Ⅰ 客家・華僑・台湾・中国』『戴國輝著作選Ⅱ 台湾史の探索』の刊行に漕ぎ着け、台北の新書発表会とシン

ポジウムに間に合わせることが出来た（馬英九総統が新書発表会に参加したのは驚いた）。

この『台湾史の探索』の解題「歴史家としての戴國輝」を書いたときのモチーフのひとつが、ほかならぬ〈日本人との対話〉であった。戴さんはなぜ日本にとどまったのか、という問いである。象徴的に言うなら、対話したい（すべき）日本人がいたから、というのがそのひとつの答えであり、そのひとりとは中国文学者・思想家の竹内好である（『台湾史の探索』422 頁参照）。じつを言うと、戴さんが竹内ハオさんと付き合っている、というのが私にとっては戴國輝の保証書のようなものだった。

台湾に帰ってからの戴さんには3回しか会っていない。晩年の戴さんは寛容ではなかったというか、日本人の友人に重きを置かなかったように見えた。戴さんは若いころ（『日本人との対話』を書いたのは41歳）日本の植民地台湾支配を厳しく批判したものの、個人的な関係においては寛容であり、研究会でも懐が深かった。そういう時代があったことを、そういうアジアの環境があったことを、懐かしく思い出す。

監訳の経験から

呉錦発編著『悲情的山林——台湾山地小説』（星晨出版社、1987年）

下村作次郎（天理大学名誉教授）

私が台湾原住民文学に関心を抱くようになったのは、呉錦発編著『悲情的山林——台湾山地小説』（星晨出版社、1987年）の監訳を担い、『悲情の山地——台湾原住民小説選』として出版して以来のことである。1992年11月に田畑書店より刊行された。

訳者は、呉薫さんと山本真知子さんである。私が高橋を監訳することになった経緯は、先輩の安本寛さんを通じて、田畑書店の編集者徐邦男さんから依頼があったことによる。当時、私は台湾文学に関する論文を少しずつ発表しはじめたばかりで、原住民文学についてはまったく知識がなかった。それで監訳なんてとんでもないと、一度は断ったが、徐さんに押しきられて引き受けることになった。出版までにそれから3年ほどの歳月を要した。理由は、知らない世界を理解するのに時間がかかったのだ。

実は訳文をおおよそ見終わった段階で、それは1990年の9月のことだが、原著者の呉錦発さんに会いに訪台した。呉さんに会うのはじめてだったが、幸い呉さんは詩人のモーナノンさんや、文化人類学者で「呉鳳の死」の作者胡台麗さん、さらに田雅各、すなわちトパス・タナピマさんに会えるように便宜を図ってくれていた。

モーナノンさんとは、作家林文義さんの案内で按摩業の職場で、胡台麗さんとは、中央研究院の民族学研究所を訪ねて、そしてトパス・タナピマさんとは、高雄で会った。トパス・タナピマさんは医者で、当時蘭嶼の診療所で働いていた。彼に会ったときは、ちょうどお産があり、赤ん坊を取り上げてからすぐに飛行機で台東に飛び、そこからバスで高雄に来たと言っていた。そのときは、“へえ”と驚くだけだったが、蘭嶼も台東もよく知るようになったいまから考えると、よくも蘭嶼から高雄までわざわざ会いにきてくれたものだと思う。

しかし、このような出会いが、その後の私を台湾原住民文学の翻訳と研究への道に向かわせてくれたのである。さらにそのとき、台湾原住民族最初の新聞発行者であるルカイ族のタイパン・ササラ（台邦・撒沙勒）さんに面識を得て、『原報 Aboriginal Post』（1989年11月18日創刊、屏東）を提供してもらった。貴重な資料である。

さて『悲情の山地』には、漢族7人7編、原住民族2人4編が収められている。監訳のあと私は「台湾原住民の詩と文学」と題する解説を書いた。この解説の執筆を通して、台湾における原住民族に関する勉強が進んだ。ただ、アミ族とプマ族のように、平地に住む原住民族を指す「平地山胞」を平埔族とするなど、いまからみれば恥ずかしい基礎的なあやまりを犯している。それはさておき、私はこの「解説」執筆の過程で、さまざまな課題に出会い、それがその後の研究のテーマとなって表れた。

鍾理和の「山地の女」（パイワン族を描く。以下同）や呉錦発の「燕が鳴く小道」（サイシヤット族）からは、漢族の家族のなかにいる原住民族や原住民族との混血のことを学ぶきっかけとなった。呉錦発の作品で見ることは、「ぼく・も・はん・ぶん・さん・ち・じんだ」は衝撃で、いまでこそ台湾人の混血を強調するが、当時にとっては一種の告白文学であった。

トパス・タナピマの「最後の獵人」（ブヌン族）からは、「正名運動」の実態、すなわち社会的には漢名しか名乗れなかった実情や、生活道具としての獵銃の使用に大きな規制がかけられていることなどを知った。

また胡台麗「呉鳳の死」（ツォウ族）やトパス・タナピマ「マナン・わかった」（サイシヤット族）では、呉鳳伝説がいかに原住民族の心と誇りを傷つけてきたか、同時に中華民国の教科書に掲載されてきた呉鳳伝説の原型をつくったのは、日本統治時代の教科書であることを明らかにした。

この呉鳳研究は、さらに「サヨンの鐘」研究を生んだ。と言うのは、鈴木明著『高砂族に捧げる』（中央公論社、1976年）を読んだときに、「サヨンの鐘」も呉鳳伝説と同じ運命をたどるとの思いから、「サヨンの鐘」の研究を行ない、実在のリョヘン社のタイヤル族の少女、サヨン・ハヨンから「愛国乙女像」を洗い流し、素顔のサヨン・ハヨン像を明らかにしたのである。それらの研究成果は『日本統治期台湾文学集成26・27「呉鳳」関係資料集』（全2巻、緑蔭書房、2007年）、『日本統治期台湾文学集成28「サヨンの鐘」関係資料集』（緑蔭書房、2007年）として出版した。

その他、李喬「パスタアイ考」（サイシヤット族）やトパス・タナピマ「小人族」（ブヌン族）からは、台湾原住民族に伝わる「コビト伝説」について知ることができた。

また、解説執筆の過程で、戦後の日本文学に描かれた台湾原住民描写作品を調べてみると、とくに霧社事件を扱った作品が多いということを知つ

た。この調査は、その後鄧相揚さんとの出会いを生んだ。

私が埔里在住の作家、鄧相揚さんに出会ったのは、90年代の終りころだったと思う。詳しいいきさつは省略するが、2000年から2001年にかけて、鄧相揚さんの霧社事件3部作の翻訳に関わり、『抗日霧社事件の歴史』、『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』、『抗日戦争をめぐる人々』（いずれも日本機関紙出版センター）の3冊について解説の執筆を行なった。これらの翻訳はいずれも台湾原住民文学研究者の魚住悦子さんが行なったが、鄧相揚さんの案内で何度も霧社事件の現場を訪ねて理解を深めた。

その過程で知り合ったタクン・ワリス（邱建堂）さんやダッキス・パワン（郭明正）さんとはいまでも交流がある。タクン・ワリスさんは、ロードフ社頭目のバガハ・ポッコハさんの孫であるが、2009年6月6日に日本台湾学会第11回学術大会で持たれたシンポジウム「台湾原住民族にとっての霧社事件」で「ガヤと霧社事件」の報告を行なった。霧社事件のセデック族の当事者が日本の学会で報告を行なったのはこれが最初で、画期的なことだと言える。

本書を出して以降、このように私の台湾原住民文学研究は進んできたが、翻訳の分野で大きな進展を見たのは、本書出版の10年後に刊行をはじめた下村作次郎／孫大川／土田滋／ワリス・ノカン編『台湾原住民文学選』全9巻である。2002年12月に第1巻『名前を返せ』を出版、2009年4月に第7巻『海人・獵人』出版を出版して全9巻が完結した。翻訳に関わった人は20名、取りあげた原住民族作家は37名であり、このような規模の翻訳は、世界の先住民族文学のなかにあっても大規模な文学選と言えるのではないだろうか。出版社は草風館であり、該社から刊行された台湾原住民文学関係書はこの9巻を含めて全20冊にのぼっている。

さて、『悲情の山地』が出版当時どれだけ読まれたのか、いまとなってはわからない。当時の田畑書店の社長であった石川次郎さんが、昨年亡くなられたからである。生前に石川さんからはあまり売れていないように聞いていたが、しかし、私にとっては、その後の台湾原住民文学研究の第一歩となった翻訳書であることは間違いがなく、大切な一冊である。

台湾の事象を網羅している歳時記

黄霊芝『台湾俳句歳時記』 (言叢社、2003年4月15日)

岡崎郁子（吉備国際大学）

日本の俳誌『燕巢』に9年近く連載し、2003年に上梓された黄霊芝の手になる『台湾俳句歳時記』は、日本統治下で日本語を強要された世代による最初で最後の俳句歳時記となる。日本のように四季のはっきりしない台湾ゆえ、人事、天文地象、植物、動物と分け、その中をまた暑い頃、寒い頃、暖かい頃、涼しい頃として季題379題を挙げる。黄霊芝文学の集大成を凝縮している一冊といっても過言ではない。

黄霊芝（1928—2016年）は幼い頃より作家になることだけを夢見てきたが、それも日本の敗戦とともに消え去ったかに思えた。しかし元来あまのじゃくの質の彼は、戦後禁止されることになる日本語による創作を戦後より開始、俳句、短歌、詩、小説等を発表の当てのないまま書き続け私家版として上梓、1970年には台北俳句会を創設、その代表を亡くなるまで続けた。主宰は使わず代表と称していた。

さて、『台湾俳句歳時記』である。限られた紙幅の中に、ときに重い内容を含みながら、黄霊芝独自の視点で捉えた台湾の自然と人事が生き生きと綴られている。肩の力を抜いた、軽妙にして洒脱、且つ爽快な文章で、機智に富み、ときには諧謔的で諷刺も込める。

各題とも本文329字とし、例句を8句収めている。本文の字数は限定しなくてもよいにもかかわらず、彼は329字を自身に課していた。実践してみるとこれは大変な作業であることがわかる。

暑い頃の季語に「台湾呆け」がある、「太陽はざらつき、風は町に辿りついたあたりですぐ死んだ。わけのわからない粘っこいものが皮膚に貼りつき、外界を隔絶し、息をしても酸素が入ってこない。けだるく虚ろな感じ。考えはまとまらず、物忘れはするし、受け答えはピント外れ。眠いようで醒めており、醒めたようで眠っている。台湾呆けなんだ、要するに」彼はふざけているのではない、これこそ黄霊芝文体の真髄である。

暖かい頃の植物に薄紅色の小さい花、「一点紅」がある、「名乗りではなく、迂闊にも年頃になってしまったために何となく紅を点じてしまった、そんな感じの、花というよりは蕾を恥ずかしげに擡げたいたいけな野草。開くより蕾むのがお好きで、香りもどうか勘弁して、という謙虚さ。……腰の

弱い茎を尺余に伸ばし、虐げられたに違いない切れ込みの不揃いな葉をつけ、無口なあの子にどこか似ている。だから僕は君が好きだ」こうなると物語の風情で、彼にしか書けない歳時記となった。学名や由来なども実に詳しい。

他にも「二二八」には「これらの解明は今後の学者と紙魚に任せばよいであろう。私たちは俳句をつくるべ。何しろ二二八という言葉は50年後の今日、喋っても罪にはもうならないんよ」とあり、「乞食祭」もユニークである、「乞食は仙人。乞食は独自の自治体をもっていた。平日は物乞いをせず、冠婚葬祭や出産の際に乞食頭の引率で金銭を貰って歩く。……昔の中国には天子の婿になった乞食もあり、建国の功臣も多く、ために乞食は上九流との通婚を許されていた。今日、乞食は墮落し、町さうろつきで犬に似、情けなや、涙が出るだぞえ」、どこの方言とも知れない彼独特のことは使いが飛び交う。台湾にとって、また彼にとってどうしても残しておきたい人事、天文地象、植物、動物を379題に込めて、正に命を削って書き上げた歳時記だという気がする。中国でも日本でもない、台湾に限る歳時記である。

1996年に黄霊芝作品に出会ってから博士論文（『黄霊芝物語——ある日文台湾作家の軌跡』2004年2月15日、研文出版）としてまとめ、上梓するまでの7、8年は闘いの連続だった。作品との格闘でも大変なのに、ナイーブで気難しく、あまのじゃくの上に癪癢持ち、その上へそ曲がりの黄霊芝との闘いに明け暮れて疲れ果てていた。論文を書いて送るとすべての文に反論を書いて返してきたし、1週間に1度は1時間程度の電話がかかってくる。今となっては懐かしく愛しい濃密な時間だった。半面、ハンサムではにかみ屋で、細やかな心配りを見せる素敵な紳士だったことは、彼に会った人なら誰でも感じたことだろう。

黄霊芝が『台湾歳時記』を残した功績は実に大きい。台湾の歴史、文化、自然、また人とともに生きる動植物の、すべてとはいわないが、これを見れば中国とも違う、日本とも異なる台湾という島国の人々の営みが見えてくる。これからの100年先、200年先の時代にも古さを感じることなく、生き続けてゆくことだろう。今このときも未来も台湾研究を志す学究には、ぜひ手に取っていただきたい一冊である。

「移行学」(transitionology) をかじった頃

オドネル、シュミッター共著

『民主化の比較政治学』

(真柄秀子・井戸正伸訳、未来社、1986 年)

若林正文 (早稲田大学)

「権威主義体制」(authoritarian regime) のタームで民主化前の国民党一党支配体制を語るの、今や当たり前となっている。しかし、私が同時代の台湾政治の動向が気になり始めた 1970 年代末は、そうではなかった。というよりは、政治体制論をやるような政治学者は台湾には関心は無く、台湾に関心のある学者で比較政治学の目で台湾を見てみようという人はいなかった。同時代の台湾政治に関して、日本の知識界では、蒋介石の独裁的反動政治が行われている、といったあたりの認識で思考停止していたのだと思う。私自身も当時は概ねそんなところだった。

初めて authoritarian regime のタームで国民党政権を捉えた論文に出会ったのは、確か Tai Hung-chao という人の論文で、著者名だけ記憶に残っている。次に記憶に残っているのは、Edwin Winckler の“From Hard to Soft Authoritarianism”という表題の論文だった。蒋介石の hard な権威主義体制から、今は蒋経国の soft なそれに移行しているという趣旨で、確かに感覚的にはわかりやすい議論ではあった。

それから、権威主義体制論の元祖 J. リンスの旧著を読んだり、ラテンアメリカ政治研究の恒川恵市氏の理論的紹介を読んだりしたが、当時は権威主義体制からの体制移行論というのが盛んになっていて、皮肉っぽくそれらをまとめて「移行学」(transitionology) と呼ぶ向きもあることも知った。

そんな頃、その「移行学」をリードしていたオドネルとシュミッター共著 (真柄秀子・井戸正伸訳) の『民主化の比較政治学』(未来社、1986 年) が出た (G. O' Donnell and P. C. Schmitter, *Transition from Authoritarianism: Tentative Conclusion*, Johns Hopkins University Press, 1986)。私は助教授になりたてだった。講義を終えて大学生協の書店の書棚にふと見つけて購入、帰りの電車に乗るや読み始めて夢中になり、乗換駅を忘れてしまった。

台湾ではちょうど蒋経国が「党外」勢力による民主進歩党結成容認に踏み切った頃である。70 年代後半から台湾政治に現れていた変動の事象が、次から次へと彼らのタームで説明され、また次の展開をも想定されているように感じられた。理論

の本で興奮を感じたのは後にも先にもこの時だけである。同書で出会ったタームは、「移行」の概念はもちろんのこと、体制現職者中の「ハト派」と「タカ派」、権力維持のための「前方への逃走」、オポジション勢力との「円卓会議」と「協定」、そして「後退的正統化」などなど、その数年後に書いた初めての台湾政治研究の専著『台湾——分裂国家と民主化』(東大出版会、1992 年) の中で、たっぷりと使わせていただいた。

しかし、その後「移行学」に関しては、リンス等の民主体制の定着論 (Juan Linz and Alfred Stepan, *Problems of Democratic Transition and Consolidation: Southern America and Post-communist Europe*, Johns Hopkins University Press, 1996) や、ハンチントンの「民主化の第三の波」論 (Huntington, Samuel P., *The Third Wave: Democratization in the Late Twentieth Century*, University of California Press, 1991) に目を通した程度であった。その一方、「移行」の開始とともに、台湾政治はアイデンティティ・ポリティックスの様相を深めていたから、エスニシティ論やナショナリズム論にも手を伸ばして、関連する呉乃徳、張茂桂、王甫昌ら台湾の学者達の業績も消化して、2008 年やっとのことで『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史』(東京大学出版会) を上梓した。

結局、自分が追いかけている台湾政治の実際の変化に応じて、政治体制論、「移行学」、そしてエスニシティ論やナショナリズム論などから泥縄式にいいところ取りをしてきたというのが、私とディシプリンとの付き合い方であった。一つの理論的領域の主要タームの来歴や系譜を把握したり、複数の事例研究をチェックしてコンセプトの内包と外延を確かめたりといったことはしてこなかった。ましてや、台湾事例により理論仮説や諸タームの有効性を検証するなどということには手が出なかった。

地域研究的政治研究とはそういうものだろう、という指摘は耳に心地よい。ただ、地域研究の柱がその地域の個性を把握することにあるとしても、関連する社会科学のディシプリンの深掘りは必要である。泥縄式のいいところ取りには限界がある。私の台湾政治研究が 2008 年で止まってしまったのは、学問的にはこの限界のためである。21 世紀の台湾政治研究は、20 世紀後半の変動を踏まえて、台湾を再度米中との三角関係の中に置いて見つめ直す国際政治経済学の構築が必要なのである。

ディシプリンとの対話はやはり大事だ。自分が必要と思う領域の理論でどこまで見えるのか、それを見極めておくというのが大事だと思う。

二冊の「バイブル」に導かれて

隅谷三喜男・劉進慶・涂照彦著
『台湾の経済——典型 NIES の光と影』
(東京大学出版会、1992 年)

G.S. Shieh

*“Boss” Island : the subcontracting
network and micro-entrepreneurship in
Taiwan's development*
(Peter Lang Publishing, 1992)

川上桃子 (アジア経済研究所)

「台湾研究、この一冊」という特集ではあるが、私にとっての「この一冊」は、どうしても「あの一冊」とのペアでないと語れない。ルール違反だと思いつつ、このエッセーでは、研究者としての道を歩み始めた頃に出会った二冊の研究書について書いてみたい。

1991 年にアジア経済研究所に就職し、半ば偶然的成り行きから台湾経済の研究を始めた私にとって、92 年に東京大学出版会から刊行された、隅谷三喜男・劉進慶・涂照彦著『台湾の経済——典型 NIES の光と影』(東京大学出版会、1992 年)は、まさしくバイブルというべき導きの書となった。この本は、農業、産業、労働、金融・財政、貿易といったテーマに一章ずつをあて、台湾経済の成長過程とその特質を網羅的に論じた研究書だ。

副題からも分かるとおり、当時、アジア NIES の一員として脚光を浴びつつあった台湾経済の全体像を、その成長パフォーマンス(光)、発展の歪みや二重性(影)の両面から描き出したものである。今読み返しても、3 人の著者による共著でありながら、全体を貫く強い統一感があることに驚かされる。私はこの本を、必修科目の教科書を暗記する学生のような心持ちで精読した。

だが、何度も読み返すうちに、私のなかでは次第に、著者たちの台湾経済観に対する違和感が膨らんでいった。隅谷・劉・涂による台湾経済論のキーワードは、「官民二重構造」「管制高地」といった、開発体制に着目したマクロな概念だ。オーソドックスな資本主義分析を踏まえた彼らのアプローチでは、国家が前景に置かれ、官民垂直分業構造や国民党官僚資本といった視点から台湾の経済発展の見取り図が描かれている。

しかし、1990 年代半ばの台湾で私が目にしたのは、そのような統制的なイメージとはほど遠い、無秩序な草の根の経済パワーであった。政府の規制を破って次々と中国に進出していく工場主たち、路地裏の工場で金属を削る男性作業員やアパ

ートの一室で輸出用のプラスチックシューズの生地にミシンをかける女性たち、警官といたちごっこを繰り広げる夜市の屋台主たち。政府がはめようとするタガを破り、「来年は今より絶対に豊かになってやる」と意気込んで前のめりに進んでいく彼ら・彼女らのエネルギーに、私は圧倒された。そして、経済学のオーソドックスな枠組みから出発する限り、この人たちの奮闘を前景に置いたミクロな台湾経済論を描くことは難しいのだろうか、と考え込みもした。

そんなときに出会ったのが、アメリカ帰りの若き社会学者、謝國雄(G.S. Shieh)が博士論文をもとに出版した*“Boss” Island : the subcontracting network and micro-entrepreneurship in Taiwan's development* (Peter Lang Publishing, 1992) だ。隅谷・劉・涂著と同じく 1992 年に出版されたこの本は、「台湾の発展における下請ネットワークと小規模創業」という副題が示すとおり、台湾経済を特徴づける高度に細分化された企業間分業の発展と、活発な創業ダイナミズムの結びつきに注目して、台湾の工業化のミクロなメカニズムを描き出した名著である。

私はこの本を読んでからはじめて、台北の川向こうのくすんだ路地裏に広がる町工場の世界が、どのように形作られ、再生産されてきたのか、アメリカの巨大な市場がこの小さな島の経済発展をどのように引っ張ってきたのかを理解した。同時に、ミクロな視点から経済発展というマクロな事象を描き出すことのおもしろさや、産業発展をミクロな主体間の「つながり」の深化のプロセスとして捉える視点にめざめた。

1990 年代から 2000 年代にかけて、私は、この本を新たなバイブルとして、中小企業の現場を歩いて回った。老板たちのあとを追って、東莞や深圳にも通った。私の台湾経済に対する関心の焦点は、産業発展の駆動力としての企業間関係の分析にあるのだが、この関心の原点は、Shieh (1992) との出会いにある。

ちなみに、2012 年から 13 年にかけて、中央研究院社会学研究所に滞在した時には、憧れの謝國雄さんと何度もお話しする機会をもち、「本を書くことの意味」についてのインタビューまでしたのだが、“Boss Island” に心ときめかせ、裏表紙の謝さんの顔写真をじっと見つめていた日々のことは、何だか気恥ずかしくて、いまだにご本人にはお話しできずにいる。

私の「バイブル」だった二冊の本が出版されてから、四半世紀がたった。台湾経済について書くときにはいつも机のうえに置いていたこの二冊も、ずいぶん長いこと手にしていなかった。今回、

このエッセーを書くことになって、改めて、この四半世紀のあいだの台湾経済の変化の大きさを思った。台湾が「官民二重構造」によって特徴づけられた時代も、活力あふれる「老板の島」と呼ばれた時代も、すでに遠い過去のものだ。

それでも、この二冊はそれぞれに、台湾経済の中に深く刻印され、今へと続く「型」を描き出した名著として、台湾経済研究の必読書であり続けていると思う。私は最近、台湾のハイテク・スタートアップについて調べているのだが、今回、久しぶりに Shieh (1992) に目を通しながら、最近出会った若い起業家たちのことを思いうかべ、彼ら・彼女らが緊密なネットワークを築きながら軽々と国境を越えていく姿を思い起こして、ああ、あの若者たちは、この本を通じて出会った老板や老板娘たちの DNA を見事に受け継いでいるなあ、と感じ入った。

スタートアップ支援やイノベーション促進のために様々な資源を動員し、至れり尽くせりの施策を講じる台湾政府の姿にも、隅谷・劉・涂 (1992) が描いたようなかつての統制的なありようからは大きく形をかえつつも、マクロな発展の方向性を先導していこうとする国家の強い意志がみとれる。ひとつの経済社会のなかに刻み込まれ、時代の変化を越えて受け継がれていく「型」の強靱さを思うとともに、優れた社会科学の書物がもつ生命力の強さに打たれる。

「を」か「で」か？

王崧興『龜山島——漢人漁村社会之研究』 (中央研究院民族学研究所、1967 年) から考える

上水流久彦 (県立広島大学)

近年私は、植民地期の台湾の建築物の現状を植民地主義の観点から研究している。その状況は韓国や旧満州とは異なり、台湾の 1945 年以降の歩みと深く関係している。それゆえ、私は台湾社会「を」研究していると思う。

だが、1994 年 10 月当時、人類学的長期調査を始めた頃は違った。台湾「で」調査するというものであった。フィールドとして台湾を選んだ学術的理由はあったが、大きな理由のひとつは、院生室の私の隣の席に台湾人が座っていたことである。彼が「台湾で調査をすればよい、萬華で妻の父は顔が広く、人を紹介できる」と誘い、都市で調査をしたいと思っていた私は、その言葉で台湾行きを決めた。隣が中国本土からの留学生であればどうなったかと正直思う。

理由はこうである。私が学んだ広島大学大学院の人類学では、長期調査に行くためにプロポーザルを書く必要があった。テーマは親族関係も含む漢人の社会関係であった。先住民研究は別として、おそらく私と同じ世代ぐらいまでの日本人人類学者にとって「漢人ルーツの台湾の人々 (以下、「台湾人」)」よりも「漢人」であることが意味を持っていた。台湾「を」ではなく、「で」であった。少なくとも私自身は、漢人に関する台湾、香港、中国本土などの論文を読み、プロポーザルを書いた。中国の華南に比べて台湾では単姓村は少なく、雑姓村が多いとは言われていたが、そのような議論もあくまでも漢人内部の差異に過ぎなかった。私の調査地は、都市であれば台湾でも中国本土でも良かったと言えば良かった。

私のプロポーザルに大きな影響を与えたのが、当時千葉大学教授の王崧興先生だった。王先生は 1935 年台湾の雲林に生まれる。台湾大学で人類学を学んだあと、東京大学大学院で中根千枝氏に学び、ロンドン留学を経て東京大学で博士号を取得し、中央研究院民族学研究所、香港中文大学、中部大学、千葉大学で教鞭をとられた。

王先生による漢人の社会関係の分析では、有名な言葉がある。「関係あり、組織なし」である。彼は、中根千枝氏の分析に基づき、「タテ社会」の基礎をなしている場の論理に従う日本の社会関係 (集団への帰属が決定するとすべての行動・

価値観は集団のイデオロギーに従属させられる)とは対照的なものとして、漢人の社会関係を提示した。

漢人社会では、類が同じという同「類」に基づき、ネットワークを個人中心に広げる。そのネットワークを「関係網」と中国語で呼び、その関係網を多く、そして四方八方に持っていることが中国社会では望ましいとした(傍点筆者)。漢人の「家(jia)」もその関係が形になったもので、「家」がなくなっても関係は残るといふ。

家族や宗族、宗親会を組織として分析する視角しかなかった当時の私には、個人のネットワークの集積、ネットワークの顕在化としての組織という王先生の視点は新鮮であった。「関係あり、組織なし」という言葉に魅了された研究者は多い。漢人対象の人類学・社会学では「関係学」という研究領域もある。

この「関係あり、組織なし」という社会関係の在り方は、漢人としての自身の経験もあっただろうが、学術的には龜山島のフィールドワークから見出された。それをまとめた民族誌が、中央研究院民族学研究所専刊一三として 1967 年に出版された本書である。

周知のように龜山島は、1977 年に軍事演習場に指定され、住民は島外へ強制移住させられた。1999 年から観光地として開放され、現在、上陸は可能だが、居住はできない。本書は強制移住前の龜山島の生活を知ることができる貴重な一冊である。そこでは、個人の視点から合目的に様々なアソシエーションに入る漢人の社会関係の姿が描かれている。

漢人社会の人間関係「を」鋭くついた「関係あり、組織なし」は、台湾「で」の緻密な調査から生み出されたが、意外にも王先生は、中国本土で漢人の調査できないため、台湾はその代替地だと語っていた。1988 年に出版された『文化人類学』5 (アカデミア出版会)では「漢族研究の最前線」として特集が組まれたが、その調査地は台湾と香港であった。このことが彼の「代替地」という言葉を実証していよう。そして、今、人類学的漢人研究のメッカは、調査可能となった中国本土である。

私が台湾で長期調査中の 1995 年、王先生は中央研究院民族学研究所の特案研究員として台湾滞在中に、60 歳で急逝された。その年の前後から、周知のように本格的に学術分野でも「本土化」が進む。台湾の人類学界も、政治とは無関係ではなかったと思う。

戒厳令時代の人類学的研究を見ると、「一つの中国」の影響か、漢人研究は大きな中国世界の枠組みの中にあった。「台湾人」の研究ではなかつ

た。さて、彼が生きていたら、現在の台湾研究の状況をどう考えるだろうか。「を」と「で」の問題にどのような見解を示しただろうか。このような問い自体無意味と笑っただろうか。

私もメンバーである科学研究「少子化に揺れる東アジアの父系理念」(代表は植野弘子東洋大学客員研究員)が、2018 年度から 4 年間の予定で、台湾、中国、韓国、沖縄、日本をフィールドとする研究者による共同で始まった。沖縄島の系譜継承は、沖縄戦の影響を抜きにして語ることはいできない。中国の場合、長年の一人っ子政策の影響が研究されている。

4 年間の研究を終えた時、台湾の戦後 70 数年の社会変容と結びついた、「台湾人」独自の父系関係を見出すことができるだろうか。それともやはり漢人研究なのだろうか。龜山島のフィールドに基づく王崧興先生の研究は、自分が台湾という社会に、人類学という課題にどう向き合っていくかを常に突きつけてくる。そのような研究をされた王崧興先生に感謝の意を込めて、この拙いエッセイを捧げたい。

グローバルに泳ぐ台湾のエビ熱

村井吉敬『エビと日本人Ⅱ——暮らしのなかのグローバル化』（岩波新書、2007年）

清水美里（立教大学）

台北でエビとヘチマの小龍包を食べ、舌鼓を打った。この土地の人はエビのおいしい食べ方を良く知っている。蝦捲、蒸しエビ、えびせん、挙げればきりが無い。

村井吉敬『エビと日本人Ⅱ——暮らしのなかのグローバル化』（岩波新書、2007年）（以下、「Ⅱ」と記す）によれば、日本人はエビを食べ過ぎであるのに、食べ方は貧しい（136頁）そうだ。思えば、日本では揚げ物か冷凍食品で食べることが多いエビ。台湾で豊かなエビ料理に出会えるのは、ひとつは地元の食材であったことが挙げられるのではないだろうか。

「Ⅱ」は前作、『エビと日本人』（岩波新書、1988年。以下「Ⅰ」と記す）の初版刊行から、20年を経て出版された。タイトルには全く台湾とは書かれていないが、ここ数十年の台湾の国際的地位を把握するのに非常に役立ち、また大いに示唆を受けた。もとは改訂版として企画されたものの、エビの世界が20年の間に大きく変化し「Ⅱ」としての刊行となったという。その変化の中心に位置しているのが台湾人のエビ関係者なのである。

「Ⅰ」が刊行されたのは1988年である。1980年代はもちろんのこと、1990年代まではエビといえば台湾を想像できていた。かつて、日本のスーパーでは台湾産のエビ（ブラック・タイガー）を良く見かけた。しかし、いまや日本の食卓で台湾産のエビに出会う機会はめっきり減った。それは「Ⅰ」のなかでも台湾養殖業の苦境と衰退の兆しによって示唆されている。

生産の現場という観点からすれば、2007年刊行の「Ⅱ」からは台湾に関する記述は減少しているはずであった。だが、「Ⅱ」では後述するように台湾が折に触れ言及されるのである。

学部時代に中国文化を専攻した自分は、当時さほど台湾に関心がなく、台湾に関連する書籍を数えるほどしか読んでいなかった。その中で、後になって読み返した書籍は、おそらく「Ⅰ」くらいである。「Ⅰ」を台湾に関連する書籍として挙げるのもおかしい話かもしれないが、それだけ「Ⅰ」に登場する台湾のエビ養殖の話が印象的であった。東南アジア諸国と並列に紹介され、気候風土のみならず「消費する日本」にたいして「供給する地域」という位置づけから、東南アジアと台湾の近

さを感じた。エビの流通は南北問題の象徴的現象の一つとして紹介され、台湾は「南」の収奪される諸地域のうちに入っていた。

だが、それだけではない異彩を台湾のエビ養殖は放っていた。工場のような機械的な養殖場で、まるで稲作農家のようにエビを手塩にかけて育てる描写がある。これが、調査対象と作者の距離の問題であるのか、生産者の特性であるのか分らないが、エビに対する感情の奥行があった。そして、大学院在学中に書店で「Ⅱ」を見かけたとき、たしか台湾についても書かれていたという記憶もあってすぐに購入した。

読んでみて驚いた。かつて日本人や日本企業がいた技術指導や流通に、台湾人・台湾企業が進出していた。だが、日本と同じ道を歩んでいるのではないようであった。

台湾のエビ養殖業は1980年代終わりの病気の流行によって壊滅的打撃をうけた。3年で生産量が10分の1に減ったという。この危機の乗り越えるプロセスに、台湾人のたくましさ、したたかさを感じる。それは、土地に残り経営を変えた人と、海外でエビ業を継続した人の2通りに分かれる。

まず、エビの養殖が盛んだった台湾の東港地域では、ハタ養殖が盛んになったという。一部残ったエビ養殖もその品種がブラックタイガーからバナメイに変わった。これはエビから他の水産物の養殖に転換しただけにも見える。

だが、「Ⅱ」で紹介されている許武雄、炳傑さん親子は、ハタ、バナメイエビ、ミルクフィッシュの多角経営を行っており、「養殖魚種はその時いちばん利益になるものを選び、不調になればすぐに転換してしまう」（118頁）という。市場の変化にとっても敏感である。日本植民地期の「米糖相剋」現象を彷彿とさせるような記述である。

「Ⅱ」には、次のような会話が描写されている。

ウナギ、ブラックタイガー、クルマエビなど、
「台湾養殖業はさんざん日本に振り回されて腹は立ちませんか」と養殖一家の跡取りの許炳傑さんに尋ねたところ、「いまは海外市場は日本だけでなく世界中に広がっているのだからどうとも思わない」との答えが返ってきたのが印象的だった。（123頁）

この会話は日本の凋落を表しているとともに、台湾が世界のなかで確実に地位を獲得してきている事を示しているように思えた。

次に、海外のエビ業と台湾人の関わりであるが、「Ⅱ」では東南アジア、中南米、オーストラリアのエビ養殖に台湾人が携わり、また台湾の養殖技

術が各地に伝播したことが何度も言及されている。1980年代終わりのエビの病気の流行によって、台湾の養殖技術がかえって世界各地に広がったともいえる。

だが、そうでなくても東南アジアへの技術移転は確実に行われていた。東港は「養殖と漁業とグローバル化が共存」する港町だという。一次産業の生産者が積極的に海外の情報をキャッチし技術の向上に余念がない様子は、台湾の他の事例でも度々目にしていたので「Ⅱ」を読んで大いに納得する部分がある。

前作「Ⅰ」は日本人に反省を促す内容であった。本著「Ⅱ」では、飽食文化とエビを消費するだけの日本を批判しつつ、持続可能な発展や「自然の理」を考え始めたエビ養殖の現場から思想や哲学を学び取る姿勢が感じられた。「Ⅱ」からこの数十年の台湾の変化を知り得たことはもちろんながら、パッションを読み取るという研究対象たる台湾との向き合い方のお手本の一つとしても、本著から得たものは多い。

ファンタジーからノスタルジーへ

西川満『化骨鱈魚』
(日孝山房、1992年)

莊 千慧(九州大学)

筆者が拙稿「一九四〇年代の在台日本人の郷土意識——池田敏雄の台湾民話を例として」(『日本文学』2015年9月)を執筆しはじめた頃、民話採取をめぐり池田と交流の多い、西川満(1908-99年)にも関心を抱いた。池田敏雄が台湾の民俗採集をはじめたきっかけは、西川満の日台融合を目指す文学理念と関わっていた。そして池田が採集した民話に基づいて、西川が潤色して出版したのが、『華麗島民話集』(1942年)である。

池田敏雄も西川満も、台湾と日本本土との〈融合〉に関心を抱き、様々な文学的試みをした在台日本人ではあるが、西川を筆頭に展開した〈外地文学〉の文学運動については、当時から多くの批判をうけていた。西川の〈台湾文学〉は、エキゾチックに台湾を描き、ロマンチズムに陥ったものとして評されてきた。

西川満とその文学運動に関して、筆者は必ずしも評価するわけではないが、彼が台湾の〈郷土文化〉について思いをものした1938年の随筆は、読んだ当初からずっと記憶に新しい。

日頃からその多様性に煩悶さを覚えてきた筆者は、己の住む土地の歴史、己の住む土地の文学を、何より重んずべきことを、わたしは他でもない、仏蘭西文学から学びとつたのである。仏蘭西程、地方固有の文化を尊重する国を、わたしは他に知らない。もしわたしが仏蘭西文学を勉強しなかつたとしたら、恐らく終身、己を育んでくれた、台湾に興味を持ち得なかつたであらう。～ああ台湾！汝こそは無限の宝庫、花開く宗教のギャラリー、未だ磨かれざる史界のダイヤモンド！ああ台湾、汝こそは、西欧と東洋の文化の融合する華麗島。わたしは台湾に住む光栄をよこび、開拓すべき歴史への興味に湧き立つてゐる。

西川満「随筆・歴史のある台湾」
(『台湾時報』2月号、1938年2月1日)

日本に生まれたが幼くして台湾に渡り、ほぼ「湾生」といいたい西川満は、早稲田大学でフランス文学を専攻する間、育った故郷である台湾の歴史・伝統文化に目を向けるようになったのであろう。そして彼が注目したのは、その固有文化をど

のように保存するかといったことではなく、「磨かれざる史界のダイヤモンド」であった。このようなスタンスから西川の〈台湾文学〉をとらえてみると、納得するかどうかはさておき、西川の文学観を理解できるような気がした。

池田敏雄の協力で刊行した『華麗島民話集』にも、上記のような西川満の文学理念が窺える。彼はこの作品について以下のように述べた。

この二十四の篇のすぐれた素材を文章に綴るに際して、私は一定の型をつくつた。断つて置くが、私は民俗学者ではない。従つて民俗風習のありのままを記録しようとか、研究しようとか、そんな気もちは寸毫も持つてゐない。人間には写真技師になる人と画家になる人とがある。一つの物体を見ても写集技師と画家とでは、そのものの見方、ものから受ける感動はおのずから異なる、更に表現の手法は一層変つてくるのであらう。写真には写真のよさがあり、画には画のよさがある。殊更、長短を論ずる必要はない。ただ私は『華麗島民話集』を綴るにあつて、民間伝承をそのまま文章に現はすと云つた写真的な行き方を棄て、これを単なる素材として、画家が己の生命をキャンパスにたたきこんで、芸術をつくりあげるやうに、私は私流の表現を試みた。この意味では私は、この二十四篇は単なる民話としてでなく、芸術作品としての批判を受けたいとさへ思つてゐる。

西川満「紙人豆馬」

(『文芸台湾』4巻4号、1942年7月20日)

ここからも同じく、西川満における台湾的要素や伝統文化はあくまでも彼が望んでいる文学を実現させるための道具の一つであることがわかる。彼は集めた素材を一つの型にはめ込んで、思い描いたもの(西川の言葉を借りると「芸術」であらう)を作ろうとした。

ところで、筆者は昨年度に担当した比較文学論の授業の関係で、『華麗島民話集』の現物をどうしても購入したく、多方で探しているうち、偶然西川が1992年に出版した、『化骨鱔魚』という私家本を手に入れた。本にはB5サイズ・縦書きの紙が挟まっていた。その文章は以下の通りである。

百花生日を、お祝いくださって、まことにありがとうございます。／華麗島の民話『化骨鱔魚』の手づくり本を、御座右まで、お届けいたします。／心友である三人の画伯、装画の峯梨花、口絵の立石鉄臣、挿絵の宮田弥太郎、全力傾倒のすばらしい援助を得て、楽しい絵本になりました。／原稿はもちろんですが、この活字

の一つ一つ、わたしが組み、わたしが刷り、わたしが手彩りし、文字どおりの止暇断眠、心血をそそいでつくりあげました。／ご愛蔵いただければ、幸せです。深い感謝をこめて、1992年春／西川満／合掌

この『化骨鱔魚』に収録された35作の民話のうち、20作は『華麗島民話集』にも収録されたものであり、書題の『化骨鱔魚』は戦前、雑誌『文芸台湾』に掲載されたものである。かつては彼の文学運動の理想と夢を具現化したものであったこれらの作品は、戦後日本に戻り、50年ほど経ったのち、旧友と楽しく制作する本の中身となった。『化骨鱔魚』の収録作品は『華麗島民話集』とほぼ同じであるが、製作者が抱えている思いは異なると思われる。

筆者は『華麗島民話集』の代りに偶然入手した桃色の表紙の『化骨鱔魚』を目にして、台湾人としてのナショナル・アイデンティティーを考えた。故郷として偲ぶ島は同じだが、それを「台湾」・「中華民國」・「中国」の、どのパッケージに収めて人に見せるのか、未だに世間の人々の考え方は多種多様である。その考え(パッケージ)によって、生き方をはじめ、研究のスタンスなど、自身の理念を発信する方法も変わるのであらう。そして果たして自分には、「台湾」とその研究をポップな色合いで包装する日が訪れるのか、考えさせられた。

※ 引用文献の下線は筆者による。



(『化骨鱔魚』表紙)

台湾語学習この一冊

王育徳『台湾語入門（増補新装版）』
（日中出版、1989年。原版1982年）ほか

吉田真悟（一橋大学大学院）

筆者の専門とする所は、台湾（閩南）語の社会言語学的研究である。台湾語のように国家の公用語になっていない言語、俗に言う「マイナー言語」の学習者に共通する悩みの一つは、教材の少なさだろう。台湾では勿論各種出版されているものの、台湾語に日常的に触れる機会のある台湾人を対象に書かれている為、一から学習しようとする外国人には不向きであり、独学ができるものとなると更に少ないのが現状である。そこでここでは、与えられたテーマを少し弄り「台湾語学習この一冊」と題して、日本で出版された台湾語教材の中から、これまで筆者が使用してこれと思ったものをいくつか紹介したい。

まず一冊目に挙げたいのは、語学書「エクスプレス」シリーズの一つ、『ニューエクスプレス台湾語』（白水社）である。このシリーズは、少数言語や古典言語を含む幅広い言語をカバーした、マイナー言語学習者の強い味方であり、20課で発音、会話、文法と基礎的な内容を一通り学べるように構成されている。過不足のない、最もオーソドックスな教材としてお薦めである。

台湾語の表記については教会ローマ字、漢字、仮名を並記しており、これも日本の台湾語教材では一般的な形式と言えるが、仮名表記に総督府式（日本統治時代に台湾総督府が考案した表記法）の簡略版を採用しているのが特徴的である。総督府式は単に仮名で近似音を写したのではなく、しっかりと音韻分析に基づく完成された表記体系であり、言語学的には大変興味深いものだが、その分日本語の仮名とは発音の乖離が大きいことから、初学者が大まかな発音を掴む手掛かりとしては不向きであろうと思われる。

ちなみにこのシリーズは、音声教材がカセットテープだった時代の「エクスプレス」から、「CDエクスプレス」、「ニューエクスプレス」とバージョンアップを重ねており、筆者が大学で初めて台湾語を学んだ時に使った教科書は、『CDエクスプレス台湾語』であった（当時授業を担当されたのが林初梅先生）。現在は更に「ニューエクスプレスプラス」が発売され始めているが、台湾語はまだなので、今後の出版が待たれるところである。

もっと腰を据えて、もしくは専門的に学びたいという方には、『台湾語会話』（東方書店）がある。

これも筆者が台湾語を学び始めた頃に使っていた教科書の一つで（授業を担当されたのが、著者の樋口靖先生）、基礎から応用までしっかりと学べる構成になっている。日本の台湾語学の第一人者である著者の豊富な知識が随所に散りばめられており、民謡や料理名など、コラムが充実しているのも特長と言える。

またこの教材のユニークな点は、各課本文が全て教会ローマ字のみで書かれていることである。参照用に漢字ローマ字交じり文も別途付されているが、単語や文法解説の部分も含めローマ字中心で、漢字は飽くまで補助的な役割となっている。

他の教材は日本人にとっての取っつき易さと、類推・記憶のし易さを重視して、漢字中心の表記を採用したものが多く、基本的には話し言葉として育まれてきた台湾語のような言語を学ぶ際に、あまり漢字に囚われ過ぎるとかえって母語話者の感覚からは乖離してしまう可能性もある。その意味で、上述した漢字の利点は多少犠牲にしつつも、ローマ字中心表記を採用したことは野心的な試みと言えよう。ただCDが別売りで、かつやや高価なのが玉に瑕ではある。

上記2冊は体系的に学習したい方に適した教材だが、旅行や出張といったより実用的な必要性に即応できる本も2冊挙げておきたい。

一つ目が『すぐ使える！トラベル台湾語』（日中出版）である。ホテルや買い物といった場面毎の会話集だが、発音についてはしっかりと解説されており、文法事項も適宜説明が加えられている。表記は教会ローマ字、漢字ローマ字交じり、仮名を並記する形だが、画期的なのは声調について「変調」後の音形を矢印で表示している点（著者の名前を取って「近藤式矢印声調記号」と称されている）である。台湾語の声調は7種類あるが、厄介なのはその数の多さよりも、語中や文中で別の声調に交替するこの変調という現象である。本書では変調規則のことを考えずとも自然な音形が再現できるように配慮されており、非母語話者にとっての実用性をとことん追求した良書となっている。

もう一つは『絵でわかる台湾語会話』（明日香出版）である。上記3冊がどれも対話文を中心とした1課毎の構成であるのに対し、これは場面・ジャンル別の単語・フレーズ集であるが、「文法編」に基本的な構文も網羅されている（但し発音の解説は少ないので、附属のCDに頼るしかない）。表記は教会ローマ字、漢字ローマ字交じり、仮名の並記式である。

この本の良い所は、実際の会話でよく使う自然な単語やフレーズが多く掲載されているだけでなく、同じ内容が見開きの左頁に台湾語、右頁に中

国語と2言語で書かれているので、台湾語だけでなく（台湾の）中国語でどう言えばよいかわからないという疑問にも答えてくれることである。台湾で台湾語だけでコミュニケーションを取るのが（特に外国人にとっては）現実的でないことを考えると、こうした構成もまた実用性重視の表れと言えるだろう。

現在筆者の主な関心が台湾語の表記にある為、どうしてもそれに関する内容が多くなってしまっているのだが、台湾において台湾語表記はこの10年間で大きな変化を遂げており、例えばローマ字に関しては、教育部が公告した「台湾ローマ字（台羅拼音）」の使用が増加している。現状日本の台湾語教材は、依然教会ローマ字を採用したものが主となっているようであるが、この辺りで台湾ローマ字仕様の教材が出て来てもよいのではないかという気もする。

ともあれ、巷間には「台湾語」と冠しながら中身は台湾の中国語（台湾華語）といった、羊頭狗肉の学習書もあるような状況なので、この記事が台湾語に関心を持たれた方の一助となるようなことがあれば、望外の幸いである。

ここまで比較的新しい台湾語教材について書いてきたが、最後に少し歴史的な話も付け加えておきたい。日本人向けの台湾語学習書の歴史は、当然のことながら日本の植民統治期に端を発する。寧ろ「台湾語」が研究される、更に言えば一つの言語として対象化されること自体が、日本統治時代に始まると言ってもよいのであるが、ここではそこまで遡ることは止めておく。

戦後に出されたものとしては、台湾語学の泰斗、故王育徳氏による『台湾語入門』と、その続編『台湾語初級』（共に日中出版）がある。日本時代生まれの著者は、戦後は兄が二・二八事件で受難、日本に亡命して、そこで言語学を修めて台湾語の研究を行いながら、台湾独立運動等の政治的な活動にも従事した。その台湾語に対する目線には、言語学者としての冷静な分析と、母語への愛情や情熱が絶妙な塩梅で同居しており、『台湾語初級』の中には、自らの手になる台湾語の随筆も収められていて、学習書としてだけでなく読み物としても、また台湾語の書き言葉形成過程の一頁としても、貴重な書となっている。

実は、前掲の『台湾語会話』の著者、樋口靖氏は王育徳氏のお弟子さん、『すぐ使える！トラベル台湾語』の著者の一人、近藤綾氏は王育徳氏のお孫さんであり、氏の台湾語に対する思いは、日本で脈々と受け継がれていると言えるだろう。王育徳氏はかつて、東京外国語大学で台湾語を教えたことがあるが、その授業を履修していた学生

について以下のような逸話が、『台湾語初級』のコラムに収められている。

学生で台湾留学生とつきあっているのがいて、得意げに「おれは台湾語の勉強をしているよ」といったところ「そんなの勉強して何になるの」という返事が返ってきたそう。「一体どうなってるんですか」とその学生は私に訴える。「そういう連中もいるさ」私は笑ってごまかすしかない。（王育徳 1993：33）

外国人が台湾語を学習して台湾人と接していると、かなりの確率でこの学生と似たような台詞を浴びることがあるだろう。かく言う筆者も上記の逸話から20年以上の時を経て、同じ東外大で樋口靖先生と林初梅先生に台湾語を習って台湾へ留学し、同様の体験をしたことがある。そもそも台湾語を使える機会自体が極めて限られていることが分かり、「一体どうなってるんですか」と、脳内で先生方に抗議したものである。

それから更に10年以上が経過し、台湾語を取り巻く環境は厳しさを増している。台湾と台湾語に関わる中で、「どうなってる」のか、その背景は徐々に分かってきた気がしているが、自分が将来誰かから同じ抗議を受けたら、やはり王育徳先生と同じように、悲しみを湛えた笑いを返すことしかできない気もするのである。

《書誌情報》

- 王育徳（1989）『台湾語入門（増補新装版）』東京：日中出版（原版は1982）
——（1993）『台湾語初級（増補版）』東京：日中出版（原版は1983）
近藤綾・温浩邦（2007）『すぐ使える！トラベル台湾語』東京：日中出版
趙怡華（2006）『絵でわかる台湾語会話』東京：明日香出版
樋口靖（2000）『台湾語会話（第二版）』東京：東方書店
村上嘉英（2009）『ニューエクスプレス台湾語』東京：白水社

「時空を超えた旅」への招待状
松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』
(慶應義塾大学出版会、2006年)

五十嵐隆幸（防衛大学校研究科）

書棚を見渡すと、ひときわ薄汚れて傷んだ書籍が目に入る。その一冊との出会いが旅の始まりだった。

若かりし頃から長らく野山を駆け巡る生活を送っていたのだが、ある日「虎の穴」に迷い込んでしまった。なんとか苦行を乗り越えようと、不思議と漢字だらけの言葉に慣れ親しめるようになっていた。そして、ある時、ふと「民主的な台湾に何故『政治将校』の制度があるのだろうか？」という疑問を抱いた。とりあえず Web で検索すると、「台湾の政軍関係：政戦系統の役割を中心に（1950-83年）」というタイトルの論文を見つけ、それを読んで私の疑問は一応の解決を見た。だが、まだ心の霧は晴れない。

執筆者の「松田康博」とは何者なんだろうと思い、再び Web を検索すると、東京大学の准教授で元防衛研究所の主任研究官とのこと。そして辿り着いたサイトは Amazon だった。高いなあ…と思いつつもクリックし、数日後に届いたのが『台湾における一党独裁体制の成立』である。おそらく私が初めて手にした本格的な学術書であろう。この分厚い書籍を開くと、私は今まで感じたことがない衝撃を受けた。この書籍は、まさに私が抱いていた様々な疑問を解き明かしてくれる「知識の泉」であった。

この出来事を大学時代の指導教授に伝えと、一度、松田先生に会って話をしてみたらどうかと勧められた。他大学の教員にアポを取って面会することすら初めてのことであり、恐る恐るメールを送ると、すぐに返信があり、後日、東洋文化研究所で面会することになった。

その数日後、口から心臓が飛び出すほど緊張しながら研究室を訪問した日のことを今でも鮮明に覚えている。そして、私が日々持ち歩くようになっていた書籍の執筆者と小一時間ほど会話をしているうちに、私は研究の魅力（魔力？）に憑りつかれていた。おそらく、松田先生の気さくな人柄と、何よりもその研究スタイルに惹かれたのであろう。それは公式HPで「『守備範囲』＝『時間的・地理的な境界線』を人為的に決めず、テーマによって意味のあるエリア・時間幅と役に立つディシプリンを選んで大胆に研究をする」と紹介されている。ロマンチックな「時空を超えた旅」に憧れを抱き、私は東文研を後にした。

数年後、よき上司や同僚に出会い、その配慮もあって大学院教育を受ける機会に恵まれた。さて、「民主的な台湾に何故『政治将校』の制度があるのだろうか？」という疑問をきっかけに、この世界へ飛び込むことになったのだが、それを解き明かすためには、まず革命軍から国防軍へと軍隊の性格が変化する過程を述べなければならないことがわかった。すなわち、かつて「大陸反攻」を目標としていた軍隊が、どのように「台湾防衛」のための軍隊へと変化を遂げたかという課題である。この漠然とした課題を抱え、私は東京大学で行われた第16回学術大会に参加し、日本台湾学会への入会を申請した。そして気づけば私は「時空を超えた旅」の旅人になっていた。

時に「研究は孤独」と聞くこともある。だが、私は旅をするなかで魅力に満ち溢れた先輩研究者に出会い、刺激を受け、一絲の孤独感すら味わったことが無い。私が旅のお供として行李の中に入れているものを少しだけ紹介すると、『台湾——分裂国家と民主化』、『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史』、『台湾の国家と文化——「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』、『中国外交と台湾——「一つの中国」原則の起源』、『共存の模索——アメリカと「二つの中国」の冷戦史』、『国宝の政治史——「中国」の故宮とパンダ』、『台湾外交の形成——日華断交と中華民国からの転換』（執筆者名略、発行日順）である。

今となっては「この一冊」と絞り込むことは難しくなっているが、これらの共通点は台湾政治を比較的長期間のダイナミズムで読み解いていることであり、まさしく私が憧れを抱いた「時空を超えた旅」の成果であった。これについて家永真幸会員が日本台湾学会設立20周年記念シンポジウムにおいて、日本における台湾研究の特色の一つとして指摘している。「台湾研究」という旅には、たくさんの立派な道標が立っているが故に、全くの異業種から足を踏み入れた私でも、地図を片手に歩み始めることができたのであろう。

「時空を超えた旅」に出会ってから、知らず知らずのうち数年が過ぎようとしている。時には迷い、山あり谷あり、だがその場に立てばあの日の情景が目の前に広がり、档案に語りかければあの歴史上の人物が応えてくれ、その時を生きた人に話を聞けばあの出来事が今に甦る。何とも言えぬ心地よい旅が続いているのだが、そろそろ一度、旅日記をまとめる時が近づいてきているようだ。

今、振り返ると、あの日手にした『台湾における一党独裁体制の成立』、それは「時空を超えた旅」への招待状だったのかもしれない。

白先勇小説の音楽に乗って

中編小説「Tea for Two」(2003) を例に

八木はるな（高崎経済大学非常勤講師）

小説を読むとき、あたかも演劇や映画を鑑賞するようにバックミュージックがあると、物語に乗りやすい場合がある。基調となる旋律を用意することで、物語が映像的に立ちあがり、俄然印象が深まりやすいのだろう。特に外国語の小説を読む際に、私は音楽の効能をよく実感する。

私が長らく研究対象としている白先勇（1937 年—）は、わりと露骨に、小説の主題歌というか、物語の主旋律たるメロディを指定する作家である。どのくらい露骨かと言うと、たとえば『台北人』の「一把青」（1966）や「孤恋花」（1970）、あるいは『ニューヨーカー（紐約客）』の「ノクターン（夜曲）」（1979）、「Danny Boy」（2001）、「Tea for Two」（2003）のように、しばしば一曲名をそのまま小説のタイトルに採用してしまうほどだ。

「一把青」は、1949 年の映画『血染海棠紅』の中で主演の白光が歌った「東山一把青」を援用したもので、「孤恋花」は、1950 年代の台湾で流行した台湾語歌謡曲のタイトルである。こと『紐約客』（2007）の短編にいたっては、ショパンの「ノクターン」、アイルランドの民謡「Danny Boy」、ミュージカル映画として一世風靡した「Tea for Two」など、世界中に敷衍した西洋のキャノンばかりが何かの約束事のように続けられている（なお「Tea for Two」の後、実に 12 年ぶりに書かれた短編「Silent Night」（2015）も「Danny Boy」や「Tea for Two」と同様、エイズと男性同性愛をめぐる物語にして、タイトルの性質も例に漏れない）。

タイトルとして物語の主題歌が明示されるほか、「ノクターン」以外はいずれもその歌詞まできちんと引用されるので、読者はその主旋律の存在を忘れることなく、否が応でも、そのメロディと物語との結束を引き受けることになる。もとよりこれらの曲に馴染みのある読者ならば、ほとんど無意識のうちに、その主題歌の中で物語を読んでいくのだろう。または私のように、その流行歌の時代に生きず、昔の名曲やクラシック音楽にもいささか不案内な読者であれば、あるいは新たな音楽的関心を広げるきっかけとなるかもしれない。

私は、作者がある種パッケージ化して提案してくる、物語とメロディとのコンボを味わうのが好きだ。ちょうど村上春樹の読者たちが、小説作品をきっかけにクラシックやジャズへの関心を生むのと同じように、私は白先勇の作品に散りばめら

れた音楽の欠片を、自身の趣味を広げる緒として拾い集めてきた。

なかでも「Tea for Two」は、これだけで一つのサウンドトラックを作れるほどの、濃密な音楽小説であると思う。

物語の舞台は 1970、80 年代のニューヨーク・マンハッタン。70 年代、台湾出身でエリート銀行員の「私」は、チェルシー地区にあるゲイバー「Tea for Two」の常連客だった。マスターのトニーとデイビッドはともに上海出身で、中国人と白系ロシア人の熟年カップルだ。二人はミュージカル調のコントが得意で、その十八番はもちろん、映画「Tea for Two」（1950）の物真似である。主演のドリス・デイとゴードン・マクレーになりきって、見事なタップダンスを披露しては客を沸かしている。

「私」に言わせれば「Tea for Two」は「東洋が西洋に遭う」最良の歓楽地（「東方遇見西方」的最佳の歓楽地）にして、その風格の上でも、グリニッジビレッジに溢れる他の「荒れた（狂野的）」ゲイバーとは一線を画す。毎晩デイビッドがピアノで弾き語るのは、ジャズの名曲「Fly Me to the Moon」や「Strangers in the Night」、あるいは「Can't Get Used to Losing You」やブロードウェイ『South Pacific』（1949）の主題歌「Some Enchanted Evening」など、少なくとも 10 年は時代の飾をくぐり抜けてきた、古い流行歌ばかりなのだ。

ハード・ロックは絶対に流れないし、流行りのディスコもないけれど、週末になると、皆がテーブルを退けて、ルンバやチャチャチャを踊り出す。そのうえ奥にはレストラン「Fairly Land」も併設されていて、刺身にエスカルゴ、シャトーブリアンに至るまで、トニーが手がける料理はどれも一流にして独創的だ。「Tea for Two」は「古きニューヨークのノスタルジー溢れる（洋溢著一股老紐約的懷舊氣氛）」、「エレガント（雅馴）」で「優しい（溫柔）」ゲイバーなのである。

ここで展開されるゲイバー表象の興味深さについては今後じっくり考えたいが、いずれにしても私は、こうして前半部で次から次へと言及される 50、60 年代のジャズやポップス、そのルンバやチャチャチャバージョンをランダムに聴きながら、どんどん「私」の物語へと引きずり込まれていく。途中、「私」の恋人アンディの死を境に、物語から一切の音楽が鳴り止むという点も重要だ（アイオワの田舎町で療養する「私」の家には、いかなる音響機器もなかったという）。

そしてその後「私」を再びニューヨークへ向かわせるのも、トニーとデイビッドが死去する結末

で流れるのも、すべてドリス・デイが歌うあの「Tea for Two」なのである。同じく同性愛と HIV と死を扱う前作「Danny Boy」が、最初から最後まで哀悼歌である「Danny Boy」の悲壮感に満ちているのに対し、「Tea for Two」の主旋律があくまで明るく、軽快なのはなぜだろう。

白先勇小説を読むと、しばしば演劇を見た後のような高揚感が病みつきになって、他の小説でも思わずバックミュージックの手がかりを探してしまう。半端な感想文のようになって誠に恐縮だが、こうした一読者としての素朴な快感が、自身の研究者としての大事な起動力となっている。

記憶を発掘する記憶

青木繁『山・林・人』
(臺北：辻本博晃社、1933 年)
に出会った話

趙偵宇（京都大学大学院）

一昨年（2017 年）、ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロ氏は、その受賞スピーチや数々のインタビューで、「記憶」について何度も繰り返している。確かに、書くということは一種の記憶術だ。世の中のあらゆるものはほとんど時間と共に去っていく。文学はそれに対抗するための強力な媒体となり、記憶を残し、変え、語り、やがて文学作品自身も人々の記憶になる。この意味では、文学研究はまさしく記憶を発掘して選択する作業であると言えよう。

あれは 2012 年のことだった。当時まだ台湾大学台湾文学研究所の修士課程に在籍中だった私は、いつも「総図」と呼ばれる大学附属図書館の 5 階でうろうろしていた。あそこの 5 階は利用者が少なく、台湾関連資料も多いため、発掘作業に最適であった。ある日、青木繁氏の『山・林・人』という、論文と随筆が交じる一冊に出会った。日本統治期における台湾の山や樹木、ないしは原住民について書かれた本だ。「なかなか面白そうだが、この青木繁とは誰なのか」と、心の中で疑問に思った。

グーグルなどの検索エンジンでヒットしたのは、ロマン主義画家の青木繁（1882—1911 年）だったが、生没はやや早いし、台湾の林業に携わる人でもなさそうだった。

そこで研究のために常用しているデータベース、たとえば「日治時期期刊影像系統」や「日治時期図書影像系統」、「台湾総督府職員録系統」などで少しずつ手掛かりを探し、「中興大学」（その前身は台湾総督府農林専門学校）、「林務局」、「公売局」などにも尋ねてみた。しかし 2012 年 10 月に発効された個人情報保護法（いわゆる「個資法」というもの）の関係で、あるいは資料がすでに存在しないといった理由で、調査は難航した。

最後の希望は、青木繁が卒業した東北帝国大学農科大学、つまり現在の北海道大学にあった。幸い、北海道大学文書館館員の山本氏が、私の拙い日本語のメールに返事をくださり、同館で青木繁に関する所蔵資料の詳細を教えてくださいました。その後、資料の複写を申請し、それらの資料から大分県国東市にある青木の住所を探し出した。しか

しそれは市町村合併以前の住所であったため、ダメもとで手紙を送ったのだが、やはりダメだった。

最後の手段として、私は国東市役所に連絡してみた。なぜなら、青木繁はかつて国東町の町長を務めたことがあったからだ。一週間後、市役所の秘書広報課の田川氏から、「青木繁さんのご子息である青木弘さんに先ほどご連絡したところ、メールアドレス、電話番号等をお知らせしてもいいとのことでした」という返答を頂戴した。最後の最後で、やっと目的地に辿り着いた。

青木弘氏は、父繁の詳しい生没年、日本統治期に繁の部下であった劉氏の連絡先、そして当時台湾で撮った家族の写真や、繁が書いた回想文があることなど、色々教えてくださった。その後、劉氏のお宅にも尋ねてインタビューをした。ここまで来て、遂に簡単なウィキペディアを作れるほどの資料が集まった。

すなわち、青木繁は1893年九州大分県国東町に生まれた。1916年東北帝国大学農科大学を卒業、同年9月より台湾総督府専売局に務める。1923年台湾総督府農林専門学校助教となり、1932年教授に昇任した。1937年には専売局に戻り、総督府中央研究所林業部技師を兼任した後、1943年より新竹州林務課長を務める。1946年に九州に戻り、1951年大分県議員に当選、1958年には国東町町長に当選し、1985年3月他界した、というように。

青木繁の詳しい経歴や随筆作品の紹介・分析については、拙著『觀念、分類與文類源流：日治時期的臺灣現代散文』（台湾・秀威資訊、2016年）の第4章第2節を参照していただければ幸いである。

さて、青木繁自身の「記憶」も少し見てみよう。例えば、登山の際に偶然原住民の結婚式を見かけたときのこと。

蕃人の群は、男は左方に圓陣をつくり、二三十人手を連ねて、エー、ホーと、歌ひながら跳躍しつゝ輪を描く。足の動き、手の振り、それは全く、友の、後輩の歡喜を、自分の歡喜として祝ふ、心からなる聲と自然的なる全身の動きだ。何等の偽りもない、何等の技巧もない、何等の誇張もない、毫毛の飾りと云ふものもない。それは全く、誠に全く自然的にほとばしる心からなる歡喜の湧出である。心からなる筋肉の活躍である。

あの、素足を大地に踏みつけた時の音を聞け。あれこそほんとの人間の足と地の接觸だ。あの足の筋肉と色を見るがいい。何等の隔てなく、太陽と空氣にふれてゐる。自然そのまゝの人間を私は見ることでした。

俺の靴——私は、自分の履いてゐる靴を凝視せざるを得なかつた。

あの、跳躍につれて出る聲の勢ひの前に、何等の抵抗はない。あの木靈を聞け。

目を右方の女群に轉ぜんか、後で聞いて知つたことであるが、花嫁を中心として、蕃社の處女のみである一手と手を連ねて、小刻みに輪を描いて、處女らしい舞踊である。

これは当時の原住民の結婚式の様子を窺わせる一文であり、一人の人間が「自然」を感じた瞬間の記録でもある。

また、当然ながら山や森林に対する記憶もしばしば表れる。

殊に感じたのは、樹木の幹と云はず枝も土地そのものが、千古の厚き苔に包まれてゐることであつた。ふんはりとみた苔を著てゐることであつた。東西兩面から年中吹きつける多濕な風の爲めと、森林の存立そのものゝ爲めであらう。此の苔を著た森林帯は、なほも、南大武絶頂まで續いてゐるが、恐らくこれは臺灣全島から見ても、特異的景觀であらう。

此の附近の稜線は、東部に緩傾斜してゐるが、西部は大斷崖なのであるから、云はば、一行は直角三角形の頂點を歩く様なもので、時々その斷崖を覗いてはハットさせられたものであつた。

日本統治期の台湾は、素人作家が盛んに作品を発表した場所であり、多くの人々が随筆を書き、多様な角度から台湾を記憶した。しかしいったいどれほどの記憶が、図書館や資料館などで、眠ったまま置き去りにされているのだろうか。記憶の発掘作業に、終わりはない。

※書誌事項：青木繁『山・林・人』（臺北：辻本博晃社、1933年初版、1934年再版）。国立台湾大学図書館、国立台湾図書館、北海道大学大学院農学研究科図書室に所蔵あり。「日治時期圖書影像系統」に全文画像あり（ユーザー登録の必要あり）。

学会・シンポジウム等 参加記

台北・中央研究院 第3回台湾研究世界大会 (WCTS) 参加記

宮岡真央子（福岡大学）

2018 年 9 月 6—8 日に台北の中央研究院で開催された第3回台湾研究世界大会（The 3rd World Congress of Taiwan Studies）に参加する機会を得た。

この大会は、2012 年以来 3 年に 1 度開催されているもので、2012 年の第 1 回は中央研究院と教育部の主催により中央研究院で、2015 年の第 2 回は中央研究院とイギリスのロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（SOAS）の主催により SOAS を会場として行われた。第 3 回は再び中央研究院と教育部の主催となり台北に戻ってきた形で、大会テーマは「グローバル化した世界における台湾——人文・社会科学との関連性」であった。筆者自身は今回が初参加である。なお、第 2 回の主題は「台湾研究のあり方」で、第 1 回の主題は特になかったようだ。3 度の大会とも、実行委員長は中央研究院社会学研究所の蕭新煌特任研究員（第 1、2 回開催当時は同研究所所長）である。今大会のプログラムの詳細や各発表要旨は、大会公式 HP（<http://wcts.sinica.edu.tw/>）を参照されたい。第 1 回と第 2 回の大会 HP にもリンクしている。第 1 回については、本学会ニュースレター 24 号に松田康博会員による報告もある。

3 日間の大会は、中央研究院の人文社会科学館（人文館）の国際会議場と 2 つの会議室を会場にして、基調講演、全体会議、2 つのラウンド・テーブル、23 のパネル（91 の発表）で構成された。使用言語は、中国語による 2 つのパネル（後述）以外はすべて英語であった。第 1 回のプログラムで中国語のタイトルが目につくのは対照的である（第 2 回はすべて英語で行われたようである）。

開幕式典では蕭新煌実行委員長のほか、陳建仁副総統と廖俊智中央研究院長が式辞を述べた。基調講演（初日午前）は、中央研究院台湾史研究所の黃富三研究員が「新たな学術領域としての台湾

研究——課題と展望」と題し、中国研究とは大きく異なる領域としての台湾研究の価値について講じた。

全体会議（2 日目午前）の主題は「国際的台湾研究ジャーナルの発刊およびグローバルな台湾研究にむけたマニフェストに関する議論」であり、2018 年 1 月から季刊雑誌として刊行されている International Journal of Taiwan Studies の詳細や投稿の呼びかけと、台湾の外で台湾研究のポストを増やすための基礎となる「台湾基金」設置の台湾政府への要望に関する議論であった。従来地域別に活動していた台湾研究の世界的なプラットフォームを構築しようとする明確な意図、そして台湾研究を明確な輪郭をもつ学術領域として発展させ、その地位を安定化させていこうとする強い姿勢がうかがえた。

2 つのラウンド・テーブルのうちの 1 つ（3 日目午前）は、「世界における台湾研究講座」が主題で、台湾の教育部の助成を受けている 4 大学——イギリスの SOAS、カナダのオタワ大学、ドイツのテュービンゲン大学、日本の早稲田大学——の各台湾研究講座について具体的報告がなされ、教育部国際兩岸教育司の畢祖安司長がそれにコメントを述べ議論した。早稲田大学については浅野豊美会員が報告したが、畢祖安司長とのやりとりの中で、台湾研究を東アジア研究やオセアニア研究との関係や広がりの中でとらえる視点が有効であり重要である旨の主張をしていた点が印象的であった。

もう一つのラウンド・テーブル（3 日目午後）は、3 日間の大会全体を締めくくる場でもあった。「世界における 3 地域の台湾学会による協働の展望」という主題で、欧州台湾学会（EATS）、北米台湾研究学会（NATSA）、日本台湾学会（JATS）の代表が各学会の活動状況等を報告し、蕭実行委員長が各地域の研究分野や関心の特徴などをまとめて総括した。JATS の報告は松田康博会員により行われた。蕭実行委員長は、今後 WCTS を台北やロンドン以外の地で開催することを期待している旨の発言をしていた。このラウンド・テーブルの主題である 3 地域学会の国際的協働という課題が、短期的には WCTS の継続的・輪番的な開催という非常に現実的なものとして展望されていることは理解できた。

筆者がこれに参加したのは、ひとえに 2018 年の本学会第 20 回学術大会の 20 周年記念シンポジウム「新たな世代の台湾研究」で報告者の 1 人だったことによる。そこでは文学・政治・歴史・人類学分野の近 10 年の研究動向を会員 4 人（赤松美和子会員、家永真幸会員、菅野敦志会員、筆者）

が報告した。WCTS 大会本部から本学会に対してパネル提供の要請があり、このシンポジウムをほぼそのまま中国語に翻訳し、いわば本学会から「出店」を出すような形で、「日本の台湾研究を深く探る：人文社会科学領域の挑戦」という主題で各自発表を行ったのである。

なお、第1回 WCTS では本学会から冷戦期台湾の対外関係と内政を主題とするパネルが提供された（詳細は前掲ニュースレター24号の松田会員報告を参照）。第2回は本学会が企画するパネルはなかったが、大会本部の要請により菅野会員が参加し、日本の過去20年間の研究状況についてラウンド・テーブルで報告している。菅野会員は第1回目から今回まで3回連続の参加・発表となった。氏の貢献と活躍に心より敬意を表する次第である。

大会本部からは事前に各パネル発表者に対して、要旨、論文、スライドの提出が順次求められた。全参加者には受付で全発表要旨集が配布されたほか、各パネルでは当該パネルごとの論文集が配布された。我々のパネルでは、洪郁如会員が座長を務める予定が校務と重なり、松田康博会員に交代した。コメンテーターは特に置かず、各自の発表後に会場からの質問を受け付けた。来場者はそれほど多くなかったが、質疑の時間には日本の研究状況について理解しようという意図の質問が複数あり、その後の休憩時間にも議論を重ねるなど、ある程度の交流と情報交換は実現できたかと思う。赤松会員からは、日本から台湾へ修学旅行に出かける高校への情報提供や講師派遣という本学会の新たな取り組みについても紹介され、この点の意義も大きかったと思う。

付言すれば、今大会中に中国語で行われた2つのパネルのうちの1つが、この我々のものであった。もう一つは、「台湾人の戦争経験」を主題とし、本学会の近藤正己会員が台湾、シンガポールの研究者とともに発表された。また、これ以外に本学会からは前原志保会員、野林厚志会員、沼崎一郎会員がそれぞれジェンダー、原住民族、エスニシティを主題とするパネルで発表された。また本学会の会員・非会員に関わらず、この他にも日本からの参加者は多数あった。おそらく夏期調査と重なる時期だったこととも関連していよう。

本学会の他にも EATS が同様に、「ヨーロッパにおける台湾の研究を評価する——EATS の見解」という主題のパネルを提供し、文学研究、兩岸関係研究、歴史学・史料研究、移民研究という4つの領域のヨーロッパにおける研究状況について論じた。といっても、筆者自身はこのパネルを聞きそびれてしまい、すぐに後悔したのであったが。

これらに対して NATSA は、「台湾研究以前の台湾の研究——アメリカ冷戦下の漢学の省察」と題し、台湾をフィールドとした冷戦期アメリカの人類学者の経験について、当事者の語りも踏まえて振り返り、当時のアメリカの台湾理解のあり方を議論するというパネルを構成した。これは、NATSA が中央研究院台湾史研究所の助成を受けて2014年より開始したオーラル・ヒストリー研究プロジェクトの成果だという。アメリカ人類学史にも台湾現代史にも連なるこのようなアプローチによる研究を、筆者自身は非常に興味深く聴いた。

3日間の大会で、今日の台湾研究の世界的広がりについて、ある程度理解できた。そしてまた、それが台湾政府の政策と非常に密接な関わりにあることも認識した。日本で行われてきた台湾研究のことを、呉叡人会員は「寂しい営み」（本学会報14号「比較史、地政学、そして日本において台湾を研究するという寂しい営み——ベネディクト・アンダーソンへの応答」、2012年）と呼んだ。しかし、今日欧米にも数多くの台湾研究者がおり（しかし筆者と同じく原住民族に関わる研究に従事する人はそれほど多くないようだが）、そしてその人たちが手を取り合い、日本の台湾研究者とも連携を深めようとしていることを、身を以て知る機会となった。そのなかで日本の台湾研究の持ち味はどのようなものか、どのような意義を持つのか、あらためて考えさせられた。まだ明確な答えはない。この先しばらく考えていくことになるかと思う。

いずれにしても、筆者にとっては大変貴重な経験となった。準備段階から大会本部との連絡調整役となり、さまざまな助言をくださった洪会員、当日見事な司会進行をしてくださった松田会員、20周年記念シンポジウムのコーディネーターであり今大会でも会場で見守ってくださった川上桃子会員、ともに発表し「戦友」となった赤松会員、家永会員、菅野会員、そして「出店」の売り子として筆者を派遣してくださった本学会に対し、この場をお借りし、衷心深謝申し上げたい。

学界動向

日台関係史研究の現状と展望

川島真・清水麗・松田康博・楊永明
『日台関係史 1945-2008』
(東京大学出版会、2008 年)
を出発点として

福田円 (法政大学)

本稿では、筆者自身が過去5年間に行ってきた日台関係史に関する研究活動を振り返りつつ、1970年代以降の日台関係史研究に関する近年の研究動向を紹介し、今後の研究課題を提示することを試みたい。

筆者が日台関係に関する学会動向を紹介することについて、奇異に感じられる会員諸氏も多いと思うので、まずは筆者と日台関係研究のかかわりについて紹介したい。筆者は、2013年に単著『中国外交と台湾——「一つの中国」原則の起源』(慶應義塾大学出版会)を発表した後、これに続く1970年代の「一つの中国」原則形成の過程に関する国際政治史研究を軸としつつも、並行してそこから派生する幾つかの研究課題に取り組んできた。その一つが、1970年代以降の日台関係史の研究である。

筆者が日台関係史の研究に初めて関わったのは、川島真・清水麗・松田康博・楊永明『日台関係史 1945-2008』(東京大学出版会、2008年)出版に向けての勉強会に参加した時であった。右も左も分からない大学院生であった私は、とてもこのプロジェクトに何らかの貢献をするには至らず、ただただ自分の糧になったと言うほかない経験をさせてもらった。

本書の特徴は、1945年以降の日台関係の歴史を4人の著者が時系列で2章ずつ執筆しており、時代が下るにつれて著者のアプローチが歴史学的なものから政治学的なものへと変化していることである。これは史料状況による制約と各著者の専門分野に起因する特徴であったが、そうした意味でも、本書は戦後日台関係史の決定版であると同時に、当時の日台関係史の研究状況を如実に反映するものであったといえる。

その後、筆者は上述の自身の単著出版と前後して、戦後日台関係(史)の分野では主に以下のような仕事に取り組んだ。

1. 「第3章 日中航空協定 1973-1975」高原明生・服部龍二編『日中関係史 1972-2012 I 政治』(東京大学出版会、2012年10月)71-98頁
2. 「馬英九政権の『台日特別パートナーシップ』——中台和解の下での対日関係促進」『問題と研究』第41巻4号(2012年12月)65-97頁
3. 「尖閣・東海問題と日台、日中、中台之関係」松田康博・蔡增家主編『台湾民主化下の兩岸関係と日台関係』(国立政治大学当代日本研究中心、2013年3月)201-219頁
4. 「ポスト民主化台湾と日本——関係の制度化と緊密化」『東洋文化』第94号(2014年)89-120頁
5. “Chap.12; The Japan-Taiwan Relationship Under the Tsai Ing-wen Administration,” Lee Wei-chin ed., *Taiwan's Political Re-Alignment and Diplomatic Challenges*, (Palgrave Macmillan, 2019) pp.297-322

また、上記の文章を執筆する過程で、北米台湾学会(2014年)、欧州台湾学会(2018年)で1972年以降の日台関係に関する報告を行ったほか、日本国際問題研究所を中心とする国内外のシンクタンクにおいても、日台関係について調査をしたり、議論をしたりする機会を複数与えられた。

こうして振り返ると、課題を与えられるがまま、まとまりのない研究業績を残してきたように見えるし、一つひとつの報告や論考の出来についても反省は山ほどある。しかし、この間、筆者の問題意識は一貫していた。それは、自分の研究テーマの軸である「一つの中国」原則形成の国際政治史という視点から日台関係を捉えるということである。そして、そのなかで、『日台関係史 1945-2008』の時点では歴史として論じることが難しかった、1970年代以降の日台関係について、できるだけ歴史的に跡付けた上で、現在の問題を論じることが課題としてきた。

「一つの中国」原則との関係という視点から見れば、日本は一方で1972年の日中国交正常化に際してこの原則の形成における重要な役割を果たし、「1972年体制」という概念にも現れるように、それ以降政治的にはこの原則に強く拘束されてきた。しかし他方で、日本は1972年以降も台湾と緊密な実務関係を有し、とりわけ1990年代以降、その実質的な関係はより広がりと深みを増しているという側面もある。その結果、「一つの

中国」原則に拘束される日台間の政治的関係と、経済・文化的領域における関係の深化という日台関係の実態の間に緊張関係が生まれている。

このような今日の日台関係の二面性とそれらの緊張関係を論じる上で参考に値する学術的研究の成果は、この10年間で急速に増えた。

第一に、1972年の日華断交とその前後の日華／日台関係史については、外交史料をはじめとする公開公文書や当事者へのインタビューやオーラル・ヒストリーに依拠し、その詳細が解明されつつある。そして、その結果として、1972年を挟んだ日華／日台関係の断絶は相対化されつつあるといえよう。

清水麗『台湾外交の形成——日華断交と中華民国からの転換』（名古屋大学出版会、2019年）は、長らく戦後日台関係史研究をリードしてきた著者が、これまでの研究を再構成するのみならず、日華断交のプロセスを台湾外交の起点として捉えなおした研究である。また、許珩『経済協力から見る戦後日華関係』（東京大学大学院総合文化研究科提出博士論文、2018年）は、日台双方の外交文書を紐解き、日華間の経済協力に焦点を当てることで、1972年以降に形成されるような日台実務関係はそれ以前から漸進的に形成されていたという議論を展開している。

これらの研究は、「1972年」という断絶に捉われず、それ以降の日本と台湾（あるいは台湾に在る中華民国）との関係の内実と、その前の時代との連続性および断絶性を重層的な視点から分析する重要性を示している。

第二に、1972年以降も継続し、1990年代以降に深化した日台間の実務関係や文化的・情緒的な繋がりに関する研究は、今日の日台関係を語る上で、この10年間で最も進展をみた領域ではなかったかと思う。常に「過去最良の状態」と称される現実の日台関係を背景に、「台湾の人々はなぜ日本に親近感をもっているか」、「日台間の交流や協力をさらに進める上での課題は何か」といった問いに答える上で参考になる研究成果が続々と発表された。

経済学分野では、郭洋春・角田収編『中国市場と日中台ビジネスアライアンス』（文真堂、2014年）、佐藤幸人氏を中心になされてきた日本貿易振興機構アジア経済研究所と財団法人台湾経済研究院／財団法人中華経済研究院の連携研究の成果報告書『日台産業協力の現状と課題（2013年）』、『日台ビジネスアライアンスの新たな可能性（2014年）』、『日台ビジネスアライアンスの東南アジアにおける現状と可能性（2015年）』（いずれもアジア経済研究所HPから閲覧可能、<https://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Download>

/Collabo.html）、および佐藤幸人「東アジア経済の変動と日台ビジネスアライアンス」（『東洋文化』第94号、2014年）などから、これまでの積み重ねの上に成り立つ日台経済関係の最前線について知ることができる。

文化人類学分野では、三尾裕子氏を中心になされてきたプロジェクトの成果である、五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における〈日本〉——植民地経験の連続・変貌・利用』（風響社、2006年）、植野弘子・三尾裕子編『台湾における〈植民地〉経験——日本認識の生成・変容・断絶』（風響社、2011年）、および三尾裕子・遠藤央・植野弘子編『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』（慶應義塾大学出版会、2016年）などが、戦後台湾において日本統治時代の記憶はいかに受け継がれ変容してきたかについて、様々な事例をもとに論じている。

また、所澤潤・林初梅編『台湾のなかの日本記憶——戦後の「再会」による新たなイメージの構築』（三元社、2016年）は、日本統治時代からの連続性よりも戦後台湾に現れた「日本」に注目して、戦後台湾における日本イメージの生成と変容を描いている。さらに、李衣雲『台湾における日本イメージの変化 1945-2003——「哈日現象」の展開について』（三元社、2017年）は社会学的な分析枠組みを用い、国民党一党体制下のアンダーグラウンドでの日本文化受容を跡付けた上で、90年代以降の「哈日現象」について詳細な分析を行っている。

これらの研究はいずれも、民主化以降の台湾における「親日的」だとされる対日認識をどのように捉えるべきか、それ以前との連続性と断絶をどのように考えるべきかについて、数々の示唆を与えてくれる。

第三に、このように経済、文化、社会分野に着目した日台関係に関する研究の進展は、現実の日台関係の緊密化を反映していたが、日台関係の政治・安全保障面については、国際的な関心の高まりに対して、研究の組織化などがそれほど活発に行われたようには思えない。とはいえ、この分野の日台関係研究をリードしてきた松田康博氏（“Japan-Taiwan Relations under DPJ and KMT Administrations in International Context,” in Ocean Policy Research Foundation and Prospect Foundation, *Japan and Taiwan in a New Era*, (Ocean Policy Research Foundation, 2013) pp. 118-136 など）のほか、佐橋亮氏（“Japan-Taiwan Relations since 2008: An Evolving, Practical, Non-Strategic Partnership,” in Jean-Pierre Cabestan and Jacques de Lisle eds., *Political*

Changes in Taiwan Under Ma Ying-jeou, (Routledge, 2014) pp.232-246 など) や、黃偉修氏(「日本における安保法制の施行と台湾海峡安全保障問題」『アジア太平洋討究』第30号(2018年)129-138頁など)による一連の論考は、これまではあまり正面から論じられてこなかった、日本の安全保障政策における台湾の位置付けについて、歴史的経緯を踏まえた上で詳細かつ客観的に論じているという点において貴重である。この点については、筆者自身も諸氏の論考を参考にしつつ、さらに研鑽を積みみたいと考えている。また、政治学の分野においては、日台間の経済・文化交流を中心とする関係の緊密化が、政治的な関係にどのような影響を及ぼしているのかという問いに関して、より考察を深める必要があるし、何らかの分析枠組みを提示することができれば面白いのではないかと考えている。

このように、筆者自身がこれまで参考にしてきた研究について振り返るだけでも、1972年以降の日台関係史を理解しようとする場合、学際的な視点と研究領域を超えた対話が必要であることは明らかである。日本台湾学会においても、こうした日台関係史をめぐる異分野間の対話の試みがより積極的になされることを、会員の一人として期待しているし、そのために筆者自身も何らかの貢献をできれば幸いである。

日本台湾学会活動報告

定例研究会

歴史・政治・経済部会

担当理事：小笠原欣幸(東京外国語大学)

第129回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所、早稲田大学東アジアの政治と思想研究部会

日時：2018年10月19日(金)18:20~20:20

場所：早稲田大学3号館306号室

題目：在日台湾人の戦後史—『呉修竹回想録』から考える

司会：浅野豊美(早稲田大学)

報告：何義麟(台北教育大学)

コメンテーター：鶴園裕基(早稲田大学)

参加人数：38名

活動報告：

報告者の何義麟は、『呉修竹回想録』の編集者として、同書の内容を紹介することを通じ、在日台湾人に関して以下の三点について論じた。

第一に、自ら詳細に日本華僑・留学生運動史や家族史を記録した呉修竹は、日本の華僑社会における貴重な証言者としてみなすことができるという点である。第二に、本書を通じて、①台湾留学生の動向と華僑社会の再編、②GHQ占領期における華僑と留学生の左傾化、③日本の華僑団体の政治的立場の二分化、などについて理解することができる点である。また第三に、同書の内容からは、呉修竹のようなインテリ知識人が戦後に親中国派へと転向を遂げるに至った、在日台湾人としての精神の軌跡を読み取ることができるという点である。

コメンテーターの鶴園裕基は、これに対し、政治外交史の観点から、戦後在日華僑／在日台湾人の区分、戦後初期の華僑政治運動の状況や、呉修竹の歴史経験・アイデンティティを整理し、「在日台湾人の戦後史」は、特定の立場や単一の物語に還元できないという認識を出発点に据えて理解していく必要があると指摘した。

(記録者：魏逸瑩)

第 130 回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：東京大学東洋文化研究所、科研基盤 A（代表：松田康博）

日時：2018 年 11 月 15 日（木）18:00～19:00

場所：東京大学東洋文化研究所 3 F 大会議室

題目：美中貿易戦対亞太区域経貿及安全之影響

（米中貿易戦争のアジア太平洋地域の経済貿易および安全保障への影響）

司会：松田康博（東京大学）

報告：李麗珍（大陸委員会副主任委員）

コメンテーター：松田康博（東京大学）

参加人数：18 名

活動内容：

2018 年 11 月 15 日、李麗珍大陸委員会副主任委員をお迎えして、「美中貿易戦対亞太区域経貿及安全之影響（米中貿易戦争がアジア太平洋地域の経済貿易と安全に及ぼす影響）」と題するセミナーが開催された。

報告者の李副主任委員は、90 年代のはじめから大陸委員会経済処において中国との経済関係の処理に携わってきた長い実務経験をもつ。この経験をふまえ、米中貿易衝突においてどちらの損失が大きいのかを分析し、それが地域の貿易発展と安全保障にいかなる影響を与える可能性があるのか、さらに台湾はどう対応しようとしているのかについての報告がなされた。

基本情勢としては、1990 年代はじめに中国に 10 倍程度の GDP の差をつけていた米国が、近いうちに追い抜かれる可能性に直面し、「米国第一」主義によって、中国の台頭を阻止しようとしている。しかし、台湾は際立って対外貿易依存度が高い状況にあるので、国際貿易の重要性は中国よりも台湾の方が大きく、科学技術力の急速な向上、一帯一路構想、中国発展モデルなどの中国要因、米国の政策、EU・日本らの反応が、アジア太平洋地域の貿易動向に影響すると指摘する。

台湾にとって中国は最大の貿易相手であり、貿易黒字を生み出す拠点である。台湾から中国への輸出は、主に中間財であり、投資先としても、観光客にしてもその重要性は低下していない。また、米中の貿易状況は、2009 年度以降輸出入ともに伸びているが、中国は米国に携帯等の消費性商品を買っている。この消費性商品は、産業チェーンで相互補完的な役割をもっており、中国から米国に輸出する企業のベスト 20 のうち 15 社が台湾メーカーである。つまり、中国から米国への主力輸出品への制裁的な関税の付加は、台湾企業にとって大きな打撃となる。

兩岸（中台）関係は、中国が「92 年コンセンサス」または「一中」の承認を要求し、台湾は屈服せず、後退せずという極めて慎重な対応がなされている。そのなかで、中国は、高度な技術産業での発展を目指し、台湾青年の起業奨励や国民待遇の提供、産業人材の引き抜きなどを進めており、中国のレッドサプライチェーン戦略は、台湾企業の位置づけに大きく影響している。

こうした状況における米中貿易衝突は、台湾のみならず東アジア各国の経済と安全に影響を与えるものであり、望まれるものではない。台湾としては、中国への中間財輸出を通じ米国市場へとつながるサプライチェーンの調整を、長期的な対応として模索しつつ、台湾の国際的な実力と他国では代替不可能な役割を担うことを目指し、慎重に対応しているとの分析と報告がなされた。

10 数名の参加者からは、蔡英文政権下の台湾は FTA への積極的な姿勢があまり見られないのではないかなどの質問が出され、台湾企業の中国からの撤退は短期的には非常に困難であること、FTA への積極的姿勢には変更がないものの、中国の対応などにより積極的に見えない状態になっていることなどが説明された。

このセミナーでは、米中貿易戦争の状況やその影響の大きさ、そしてそれに対する台湾側の慎重かつ実務的な姿勢について、理解を深めることとなった。

（記録者：清水麗）

第 131 回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所、早稲田大学東アジアの政治と思想研究部会

日時：2018 年 11 月 16 日（金）18:20～20:20

場所：早稲田大学 3 号館 306 号室

題目：台湾籍民研究の現状と課題

司会：紀旭峰（早稲田大学）

報告：王麒麟（慶應義塾大学博士）

コメンテーター：栗原純（東京女子大学名誉教授）

参加者数：26 名

活動内容：

人の越境とそれに対する国家の管理をめぐっては、日々新たな問題が世界で生まれている。本報告は、「台湾籍民」という日本の台湾統治時代に現れた特殊な越境者に焦点を当て、まだそれほど蓄積が多いとはいえない台湾籍民研究の歴史を整理し、移民政策や出入国管理をめぐる現代的視点に立って今後の課題を提示するものである。

報告者によれば、従来の研究は台湾籍民の越境活動の実態の解明に比重が置かれるあまり、台湾総督府や現地領事館が台湾籍民をいかに統制しようとしたのかという政策面での関心は希薄であった。そこに研究の課題を見出した報告者は、明治後期から大正期にかけて日本政府、とりわけ台湾総督府と厦門・福州などの領事館による台湾籍民統制の立案および実施の過程を、台湾総督府文書や外務省文書を基に検証する。特に非合法的に「日本人」たる地位を取得した台湾籍民に対して、領事館がいかにして出入域や在留の統制を図り、台湾総督府と交渉したのかという政治過程が明らかにされた。

コメンテーターは、まだ先行研究でも不透明な部分の多い「台湾籍民」発生のプロセスを整理した上で、報告者の研究姿勢は従来の「台湾籍民」を不法な手段によって生まれた「日本人」として、その取締りの展開を重視する権力的視点から距離を置いたものと評価した。会場内からは、領事館による「日本人」に対する在留統制の法的根拠や、台湾籍民の二重国籍問題をめぐる報告者の認識などについて幅広い質問が投げられて活発な質疑が行われ、報告者の今後の研究への期待が高まる場となった。

(記録者：遠藤正敬)

第 132 回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所、早稲田大学東アジアの政治と思想研究部会

日時：2018 年 12 月 7 日（金） 18:20～20:20

場所：早稲田大学 3 号館 306 号室

題目：植民地台湾と地方「自治」制度

司会：若林正文（早稲田大学）

報告：謝政徳（大阪大学）

コメンテーター：春山明哲（早稲田大学）

参加人数：19 名

活動内容：

本報告は、植民地台湾の地方制度の制定過程と、それをもとに設けられた「地方議会」の構成や議事の過程を、公文書や当時の新聞・雑誌などの資料にもとづいて検討・分析することにより、植民地地方制度の性格と意義を正確に把握するとともに、植民地自治を通じて形成された台湾人の「地方自治」経験の一端を明らかにしたものである。

従来、一般的に台湾の地方自治が始まったのは戦後からと考えられ、植民地時代の地方制度については、主に民族運動史や統治政策史の観点から、総督府による懐柔策に過ぎないと評価されてきた。

しかし、報告者は 20 年余りにわたる戦前の「自治」経験が、戦後台湾の政治発展に一定の影響を与えたと考えており、従来の見方とは異なる立場をとる。

以下、その報告の内容である。本報告では、植民地台湾における地方行政制度の展開を、①1920 年まで、②1920 年の地方制度改革、③1935 年の地方制度改革の 3 つの時期に分けて分析した。また、分析に際して、制度面の把握（地方自治制度がいかに形成・整備されていったのか）と、実態面の分析（「地方議会」における台湾人の活動と台湾人地方自治改革要求論）の 2 つを主眼とした。

これらの分析の結果、地方自治改革要求運動に参加した台湾人政治エリートを植民地統治の協力者と捉える従来の見方とは異なり、地方行政の発言の場を利用し、植民地政府と折衝を試みることを通じて自己決定と自己実現の領域を拡大しようとした台湾人政治エリートの姿が明らかとなった。

(記録者：星野天河)

第 133 回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：東京大学東洋文化研究所、科研基盤 A（代表：松田康博）

日時：2018 年 12 月 11 日（火）18:00～19:30

場所：東京大学東洋文化研究所 3F 大会議室

題目：中美戦略競争下の兩岸關係（米中戦略的競争下の中台關係）

司会：福田円（法政大学）

報告：邱坤玄（国立政治大学名誉教授）

コメンテーター：松田康博（東京大学）

参加人数：20 名

活動報告：

隨著中國經濟實力的提升帶來的國際政經結構改變、美中關係也在日前於經貿、政治與軍事層面面臨挑戰。美中兩國是否將走向長期競爭與對立一途？如何解讀兩國在新結構下對彼此的定位？而兩岸關係的發展又將如何受牽制？

東京大學東洋文化研究所於 12 月 11 日協同日本台灣學會共同邀請台灣國立政治大學名譽教授邱坤玄以「美中戰略競爭下的兩岸關係」為題、探討美中兩大強權競爭下台灣的困境與選擇。本次演講由法政大學教授福田円主持、東京大學松田康博教授為評論人。

首先、講者以國際政經結構的變化為切入點、指出美中兩國在中國崛起與美中權力結構轉變的背景之下不必然會陷入所謂「修昔底德陷阱」(Thucydides's Trap) 所言之戰爭的不可避免性。講者強調、在中國經濟實力持續發展之時、美中關

係的未來將取決於中國是否具挑戰美國的意圖。然而、姑且不細究中國的意圖、自習近平上任以來、西方國家已逐漸對中國近來朝向政治集權與國家資本主義的發展產生疑慮。講者提及、中國「立即和明顯的威脅」已成為美國學政界的共識、而針對該威脅、美國必須「加以有效遏制」以延緩中國大陸的崛起速度。講者解釋、不同於過去美國對中國的「圍合」(congaement)策略、在川普政權的領導下、美國企圖將中國塑造成一個與「美國利益和價值觀對立的世界」、於軍事上定位中國為「戰略競爭對手」而經濟上為「敵人」。面對美國對中政策的改變、講者認為中國採取不衝突、不對抗的因應策略、試圖以「美國東來、大陸(中國)西進」的策略避免與美國在西太平洋的對撞。

就美中兩國在貿易與台灣議題上的歧見、在貿易衝突方面、講者預測中國應會讓步、但美國需在讓中國保有面子下持續協商。在台灣問題上、川普政權為了遏制中國崛起而挑戰「一中政策」與提升台灣關係的手段使台灣遭受中國在國際參與上的強力反制。隨著美中兩國的特續角力、兩岸關係將會如何發展?講者預估、台北方面、雖然蔡英文政府與執政黨在今年地方選舉遭受挫敗、蔡政府的「維持現狀」兩岸政策將不會因選舉結果而有所調整、而「九二共識」將會趨向「經濟工具化」。北京方面、除非蔡政府「主動挑釁或過度親美」、北京將不會持續增加外交打壓與武嚇。講者建議、蔡政府需在美中日之間取得「非等距」之平衡關係、維持「親美友日和陸(中國)」的親疏關係。

最後、針對松田教授的提問、講者進一步闡述美中競爭關係的內涵和美國因素在兩岸關係的效用。講者預測美中將會長期呈現對峙局面、但排除戰爭的可能性。美國在兩岸關係的介入將會越趨顯著、而此舉雖然會保障台灣的安全、但在協助台灣爭取國際參與方面將不會起明顯效用。大約有 20 人參加、討論非常活躍。

(紀錄者: Emily S. Chen)

第 134 回日本台灣学会定例研究会活動內容

共催: 東京大学東洋文化研究所、科研基盤 A (代表: 松田康博)

日時: 2019 年 1 月 18 日 (金) 12:30~15:00

場所: 東京大学東洋文化研究所 3F 大会議室

題目: 中華民國外交からの変容と台湾外交の形成

司会: 松田康博 (東京大学)

報告: 清水麗 (東京大学)

コメンテーター: 川島真 (東京大学)

参加人数: 23 名

活動報告:

2019 年 1 月 18 日 (金)、日本台湾学会および科学研究費基盤 A「対中依存構造化と中台のナショナリズム—ポスト馬英九期台湾の国際政治学」(代表: 松田康博) 研究会との合同開催による、東洋学研究情報センターセミナー「中華民國外交からの変容と台湾外交の形成」が、松田康博教授の司会のもと行われた。本セミナーは、講演者である清水麗特任准教授の新刊『台湾外交の形成—日華断交と中華民國からの転換』(名古屋大学出版会、2019 年)の書評会でもある。なお本研究は、東洋文化研究所に所蔵されている「現代台湾文庫」の史料を使った成果の一つでもある。

清水氏は、1972 年の日華断交を転換点として、中華民國政府の外交行動様式が、「中華民國外交」から過渡期を経て「台湾外交」へと変容していった過程を論じ、台湾が国際的に置かれる特殊な状況が如何にして生じたかという問題の解明を試みた。特に、「一つの中国」言説を軸に“現状維持”をキーワードとし、中華民國政府の外交における選択余地の領域について検討した。

清水氏による報告の後には、討論者の川島真氏によるコメントを踏まえ、中華民國政府が台湾に移る以前の 1912 年から続く「中華民國外交」との連続性、そこから「台湾外交」までの過渡期における日華断交の意味、安全保障上の背景などについて、更に議論が深められた。23 名の参加があり、フロアからも数々の質問が寄せられ、活発な議論が展開された。

(記録者: 三代川夏子)

第 135 回日本台灣学会定例研究会活動內容

共催: 早稲田大学台湾研究所、早稲田大学東アジアの政治と思想研究部会、科研基盤 A (代表: 松田康博)

日時: 2019 年 1 月 25 日 (金) 18:20~20:20

場所: 早稲田大学 3 号館 306 号室

題目: 2018 年台湾統一地方選挙の分析

司会: 若林正丈 (早稲田大学)

報告: 小笠原欣幸 (東京外国語大学)

コメンテーター: 松田康博 (東京大学)

参加人数: 93 名

活動報告:

小笠原報告の概要

1. 選挙の結果

両党の獲得県市数はちょうど 8 年前に戻った。国民党の勝利というよりは、蔡政権の自滅だと言えよう。

2. 民進党敗北の程度

民進党はこの20年間、地方で健闘し、2014年ついに国民党を圧倒した。ところが、今回の選挙における得票率を見ると、国民党48.8%、民進党39.2%、無党籍その他12.0%ということで、両党における得票率が4年前とほぼ逆転した結果となった。

今回の民進党の敗北の結果を立法院選挙には当てはめて2020年立法院選挙について試算すると、民進党は現有の68議席から34議席に半減する可能性がある。民進党は選挙区では地盤が固い現職が健闘するものの、比例区では柯文哲グループなどの台頭で議席を減らし、差し引きすると34議席程度という予想は合理的である。結果的に、民進党の過半数割れは確実で、仮に民進党政権が続いても政治状況は全く異なることになるだろう。

3. 選挙戦の流れ

2018年選挙戦の流れを、序盤戦、中盤戦、終盤戦に分けて説明すると、序盤における優勢から中盤に得票総数で並ばれ、終盤で逆転、大敗を喫したということになる。当初は、宜蘭県、澎湖県、嘉義市の3つを失う可能性があると言われていたが、これらは人口が少ない県市で民進党にとって大きなダメージにはならないものであった。

中盤戦では、無党派ブームが起こる中、柯文哲と対決することになってしまった。選挙戦全体の勝敗ラインとして彰化県の勝敗が焦点となったが、結局は陥落する。

終盤戦では、9月からの最後の2ヶ月で、韓国瑜現象が起こる中で、蔡政権が改革を争点にして自滅した。高雄市、台中市、雲林県が陥落することで大敗が決定的になった。敗北の原因は、とにかく蔡英文政権の満足度が低いためである。満足度の推移は、馬政権の開始当初からの低落と似通っていたが、馬政権期は3年目には回復したのに対し、蔡政権は3年目でも下がり続けたことで、今回のような結果につながった。

4. 蔡政権の問題

①漫然と試合に入ったというスタートダッシュの失敗、②「老藍男」と呼ばれる政権人事の問題、③改革の理念が十分理解されていないという問題、④リーダーシップの迷走、優柔不断と独断専行という両方のイメージ。これらが複合した。その一例としては、8月23日の南部水害の際の視察において、水の中を歩いて被災民に声をかけるのではなく、装甲車の上から被災民に手を振るという失策をあげることができる。これは強い批判を浴びた。

次の敗因として、選挙戦略の失敗が挙げられる。民進党への支持はじわじわと低下したが、国民党も期待を集める状況になかったため、6月に柯文哲と決裂したものの、地方選挙という性質上、この段階ではまだ勝機はあった。

ところが、9月以降、政権の選挙キャンペーンにおいて、今回の選挙を「改革を支持するか否かの選挙」と位置づけたことが、情勢の激変につながった。支持率が下がり続ける中、蔡英文政権は、「自分たちは正しいことをしているが理解不足なのは民衆である」と前のめりになる形で、「この改革を中断してはいけない」という主張で選挙戦を戦ったため、各改革への反対派が結集する形で、敗戦が決定的になった。正面から逃げずに改革を訴えたことは正直であると言えるが、政治的には必ずしも賢明ではない。

5. 台北市、高雄市、台中市、彰化県、雲林県、新北市などの事例分析

①台北市：

蔡英文および民進党幹部は、当初、柯文哲を再度推薦し、独自候補は立てないという選挙戦略を描いていたが、2018年に入って対抗馬を立てるべきだという民進党の支持層の圧力に抗しきれなくなった。このため、民進党が候補者を出したことで、柯文哲の「藍緑のどちらでもない第三勢力」という立場を際立たせ、結果的に柯にとっては有利になった。姚文智民進党候補の低迷が、他の県市の情勢にマイナスの影響を及ぼしたと言える。

ちなみに、4年前の国民党候補連勝文の得票率と丁守中氏の得票率が同じであるということから、国民党の台北市の支持率が上がっていないことがわかる。柯文哲との決裂が、台湾全体でも中間派を反対側に追いやることになり、民進党の敗北に繋がったと言える。

②高雄市：

高雄市では、4年前は陳菊氏が68%もの得票率を得て勝利したが、蔡政権への失望・不満が高まる中、南部において民進党が体制化・権威化していることへの潜在的不満が韓国瑜現象によって爆発したと言える。民進党内部の予備選挙において、党の公認を得さえすれば当選確実という露骨な態度に対する反感もあった。韓国瑜の支持率が動き出したのは、9月からだったが、最後の2ヶ月で「韓国瑜現象」が圧倒することになった。TVBSの選挙直前(11月6日)民意調査を見ると、態度保留の数を両候補に割り振ると、選挙結果を見事に反映する正確な数字であった。

韓国瑜現象は、反民進党・反エリート意識・ポピュリズムのミックスによるものであり、韓側が、

民進党がエスタブリッシュメント化したことへの反感を利用したと言える。独特のお笑い調の話方やユーモアなど、韓個人のパーソナリティも成功のキーポイントであった。

③台中市：

台中では、大気汚染が選挙の争点と化したことが、民進党の敗北にある程度影響を及ぼしている。そのロジックとしては、蔡政権の脱原発政策のために中部の火力発電所がフル稼働しているため、台中市の大気汚染が悪化したという図式が、SNSなどを通じて市民の不安を招いていた。

こうした状況は、今回の選挙で同時に行われた公民投票第7案（火力発電所の発電量を毎年1%ずつ減らすことへの賛否）への賛成票率は、中部の県市で多いことから、ある程度肯ける。国民党の各県市の絶対得票率と公投第7案への賛成票率との相関係数は0.523で、両者の間にある程度の相関関係があったと言える。

他方、台中市の区レベルの分析では両者の相関関係は弱い。全体として統計的に有意であると断言できるか微妙であるが、公投の賛成票数の方が国民党の得票数より多いので、選挙に一定の影響を与えたと言えるのではないか。

林佳龍は「やり手」と言われ、「政治手法が強引」という批判もあったが、満足度が致命的に低かったわけでもない。盧秀燕は韓国瑜のように爆発的な人気があったわけでもなかった。したがって民進党の敗因は、蔡政権の不人気と大気汚染の争点化であると言えよう。

④地方県市：

彰化、雲林、旧高雄県などの農村地帯で民進党が大敗した原因は、国民党系の地方派閥や農会の動員があったからという見方があるが、それだけで片づけるべきではない。蔡政権の不人気、農産物価格の下落、地方での民進党のふるまい、郷鎮選挙における民進党の選挙戦のやり方などの様々な要因があった。

⑤新北市：

新北市は移行期正義の問題が焦点化した選挙区と言える。2018年当初、民進党にとっては、あわよくば新北市の市長の座も奪取して、国民党の息の根をとめてしまえるという見方もあった。中堅実務家タイプの国民党、侯友宜候補に対して、民進党はベテランの蘇貞昌候補の対決となった。侯友宜候補には、権威主義体制期に警察官としてかわった過去があり、そのことが選挙にどう影響するのかがポイントとなった。

1989年4月、権威主義体制からの転換期にあった当時、台湾独立を主張していた鄭南榕に逮捕状が出て、警察が現場に突入しようとしたところ、

鄭南榕が焼身自殺したという痛ましい事件があった。鄭南榕は、独立派・民進党支持者の間では英雄視されている。当時、警察の刑事組長として現場に突入したのが侯友宜であった。

侯の30年前の行為・責任について、民進党は何度も議論をしかけ、移行期正義促進委員会の内部の会議で、国民党候補侯友宜の過去を洗い出して選挙で打撃を与えようという発言が、メディアで暴露されるという事件があった。これに対して、権威主義体制期およびその転換期に働いていた多くの公務員、警察、軍人、教員らがいやな思いをして、不安や反感が広がったという経緯があった。

台湾社会において、移行期正義の問題は二重に理解されていないと指摘できる。第一に、民進党支持者は国民党をたたく手段と考える傾向がある。第二に、台湾社会は一般的に蔣経国に対する郷愁がいまも強いことも挙げられよう。「美麗島民調」2018年6月では、「歴代総統で誰が最も「台湾の価値」を堅持あるいは代表したと思うか？」という世論調査で、実に43%の人が蔣経国と答え、2位の李登輝の13.8%を大きく引き離して圧倒的な1位となっており、台湾社会では今も蔣経国に対する郷愁の感情があることがうかがえる。ここ数年、台湾社会では、移行期正義の議論が高まってきたが、その現実には変わっていないと言えるだろう。

6. 民進党の問題

今回の民進党大敗の原因として、民進党自体の問題も検討する必要がある。民進党は、完全執政が落とし穴となり、支持者の期待から失望へ、賞味期限がいきなり切れてしまったと言える。具体的には、立法院で過半数を制し、民進党の理念を実行していける状態になったことで、支持勢力は、強硬に理念の実現を要求し、実際に次々に理念を法制化していくことになった。

こうした状況について、一部の老練政治家らはその危険を承知していたものの、実行された理念は多数派の反発・不満を招くことになり、反対に実行をためらった理念は、それを推進する少数派から強烈に批判されるということになった。これにより、2014—16年に形成された進歩派のアライアンスも空中分解することになり、ひまわり運動で結集した勢力もばらばらとなってしまった。例えば、年金改革、脱原発などのエネルギー政策や移行期正義政策では反発に遭い、同性婚の合法化、原住民の権利保障、労働者権利保障では突き上げに遭うことになった。

第二の問題としては、党の体質・理念の問題が挙げられる。具体的には、民進党は地方ではエス

タブリッシュメント化していること、党内の予備選挙での内紛やみにくい争いがあったことなどにより、自分たちが「権威・権力批判」の対象となっていることに対して自覚がうすい点、自分たちの理念がまだ多数派でないという認識が欠けている点などが挙げられよう。かつては、国民党の一党体制と戦うということで、様々な矛盾についても大目に見られてきたが、選挙民の目は厳しくなっている。また、国民党政権を攻撃するために使われた手段が、ブーメランとなって自分に向けられている点もある。

例えば公民投票は、台湾において国民党の権威主義体制と戦う手段として期待がかけられてきた。しだいにそれ自体が民主主義の中核理念となり、絶対に正しいこととされ、立法院で成立要件を有権者の2分の1以上の投票から4分の1以上の投票へと引き下げる法改正を行なった。完全執政として立法院で多数派である民進党は、こうした改正を行う必要はなかったが、公民投票については「思考停止」状態となっていたと言える。今回、国民党は喜んでそれを活用したのである。

7. フェイクニュースと中国要素の影響

① フェイクニュース：

フェイクニュース（假消息）はいまに始まったことではなく、当局発表より身近なうわさを信じやすいというのは、台湾社会の伝統的特性と言える。それがネットを通じて、より速くより広く拡散するようになった。

例えば、「中国人観光客が減った → 花蓮や南投の観光産業が打撃を受けた → 他県市でもホテル、バス、お土産などの関連企業が影響を受けた → 消費停滞 → 不景気 → 蔡政権が悪い」という図式や、「中国への農産物輸出が減った → 農産物価格暴落 → 蔡政権の対中政策が悪い」という図式のうわさも多かった。野党陣営により意図的にねじまげられ、政権攻撃の手段とされている事例が多いが、政府側の政策の説明能力が弱く、情報発信の方法が不用意という問題もある。

② 中国要素：

中国による台湾世論の操作も、新聞、ネット、人、様々なルートで常に行なわれており、今に始まったことではない。関空閉鎖の際に台湾人が書き込んだ情報が、中国で再発信され台湾で拡散したように、人目を引く情報は、中台間で瞬時に拡散する。そのほか、韓国瑜に関するネットの反響が大きかったといえ、FBのリアクション、YouTubeアクセスなどに中国が関与しているとの見方がある。中国のネットユーザーが台湾のサイトにアクセスすることも以前からある。蔡英文、頼清徳を

批判する書き込みもあり、「中国人観光客が減った」「農産物の中国向け輸出が減った」「だから台湾の景気が悪い」として蔡政権を批判する材料として使われた。

こうした政権攻撃の情報の浸透を前提にして、高雄市の韓国瑜のように、「観光客を呼び戻す」「農産物を海外に売り込む」とアピールし選挙を有利に戦った。この他に中国側は、「中華統一促進党」のように、台湾内部で共産党の指令で動く組織を養成したり、国民党および国民党系の人脈を通じて影響力を強めようとしていたりしている。

8. 2020年総統選挙の展望

① 今後の日程：

立法委員補欠選挙が1月27日（台北市第2、台中市第5）、3月16日（新北市第3、台南市第2、彰化県第1、金門県）に、計6議席で争われるが民進党は現有の3議席を維持する見込みで、得票率も悪くないと予想されるが、かえって民進党の危機感が緩む可能性がある。

国民党・民進党の立法委員候補を決める予備選挙は、春節明けから4月上旬であり、総統候補を決める予備選挙の日程は両党ともまだ決まっていないが、おそらく民進党は3月から4月末にかけて決定し、国民党は5月から6月頃決定するのではないかと。柯文哲は、両党の候補者を見た上で、7月か遅くとも8月に出馬の可否を決定するのではないかと。

② 各党の候補者：

民進党：蔡總統の支持率は、昨年12月が大底で再選の支持25%、不支持67%という調査もあった。しかし、今年に入り習近平講話への反発と独立派・非主流派が仕掛けた蔡おろしが不発に終わり、蔡總統の人気がある程度回復した。党内は蔡英文で固まったと見えるが、不満・不安はくすぶる。4月頃もう一山あるかもしれない。

国民党：呉敦義と朱立倫の争いではあるが、現状では支持率が蔡英文よりも低い呉を候補にした時点で、国民党は事実上、敗戦同様となり、党员投票にせよ世論調査にせよ、呉が総統候補者となるのは不可能と思われる。また、王金平が出馬宣言と報じられているが、世論調査の数字からも年齢的にも困難であるため、本命はやはり朱立倫となるだろう。

9. 習近平の対台湾工作の展望

2019—20年のねらいとしては、①国民党をゆさぶる、②台湾政治をゆさぶる、という二点が挙げられる。

まず、①について、習五項目で国民党の「一中各表」に打撃を与えた。今後、国民党が首長となっている縣市への中国人旅行者差し向け、農産物・養殖魚の買い付け、関連企業を通じた地元への投資などが実行されるであろうが、習近平は「ただ飯食い」は許さないため、国民党は徐々に逆らえなくなると考えられる。

次に、②「台湾政治をゆさぶる」について、民進党政権を退陣に追い込むことを第一の狙いとしている。国民党候補については、呉敦義を嫌い、朱立倫の方を好んでいる。また、柯文哲について信用はしていないが、利用価値があると考えている。したがって中国側は当面、「朱でも柯でもよい」というスタンスではないだろうか。中国側の真の狙いは、台湾の政党政治をガタガタにすることであろう。

松田コメントの概要：

1. 台湾政治を分析する3つのキー概念

これまで、台湾の選挙がある際などに口頭で語ってきたが、変化が早く変化の幅が大きい台湾政治分析をする際のカギとなる3つの概念について、今回は機に以下にまとめておく。

第一の概念としては、「頻繁に変わる制度と水の流れのように変化する民意」が挙げられる。台湾の選挙では、頻繁に制度改革や新たな制度が作られるため、新たな制度を利用し、自分が行動を起こした後に発生する民意の変化を予測した者が勝利を収める、という図式が見受けられる。これは、李登輝による一連の民主化改革や、陳水扁の「公投綁大選」などの例からも明らかであろう。

そして活力に満ち、臨機応変が当たり前の台湾社会では、例えば陳水扁出馬・当選などの例にあるように、「予測可能なことは前倒しで発生する」という理論が挙げられよう。これは、「台湾は裏切らない（＝退屈に見える選挙が最後には必ず劇場化する）」と言い換えることもできるが、台湾政治を予測する上で重要な第二の概念と言える。

第三に、「評論家のロジックと当事者のロジックは大きく異なる」というものである。例えば、04年総統選挙において、国民党の連戦と宋楚瑜が組んだ「連宋配」や、18年統一地方選挙で敗色濃厚な中で、民進党が台北市長選挙に擁立した姚文智の出馬などがこの例であらう。これらの事例では、外野の評論家的な立場からは理解しがたい選択に見えるが、当事者の立場においては確かに一定の論理が存在しており、その論理に従った行動をとっているに過ぎない。この当事者の論理を把握することで、「あり得ないことや、馬鹿げたことが平

然と発生する」という台湾政治の展開を理解することができるだろう。

2. 2018年選挙分析に関する質問とコメント

次に、選挙分析に関する若干の質問を行う。まず、民進党が負けることはわかっていたが、最大の疑問は、「なぜこれほどまでに負けたのか？」である。これに関してわかっているのは、国民党がよくなったからではないことだけである。民進党政権の運営パフォーマンスが悪かったとしても、「なぜこれほどまでに負けたのか？」という疑問が残る。これがわかれば、2020年総統選挙の方向性が理解できる。

そこで、この疑問について2つの仮説を立ててみたい。仮説Aは、「コアリションの結成と崩壊」である。前回（2014年）の統一地方選挙、および2016年の総統選挙においては、反馬英九、反サービス貿易協定、反原発、その他のさまざまな改革推進派、無党派などが結集する、一種のコアリションが結成されたことが、民進党の勝利につながったが、2018年はそのコアリションが崩壊したことが敗因だと仮定すると、このコアリションが再結成できれば、2020年の選挙では民進党は善戦（奇跡的に再選）になるだろう。

次に、仮説Bとして、今回の選挙結果は既成の政党政治（エスタブリッシュメント政治）に対する嫌悪感（＝政治不信）の広がり原因であると。つまり、国民党も民進党も実際に政権を運営したらダメだったために、柯文哲と韓国瑜が順番に既成政党が優位である現状を破壊した、ということになる。この場合、政党政治を一度破壊したいという有権者の願望が、依然として強いのであれば、2020年は柯文哲が出馬し、当選するチャンスが大きくなるといえ、台湾社会における既成の政党政治への破壊願望の強弱は、少なくとも柯の出馬の重要な判断材料となるだろう。

第三の質問は、「公民投票が選挙にどの程度影響を与えたのか？」である。例えば、同性婚の議題が今回の公民投票のテーマになったが、同性婚の問題はすでに憲法判断が出ているため、いずれ法律が作るか、法律がなければ同性婚を民法によって処理することになるにも関わらず、それでも公民投票のテーマとされた。しかし、そもそもマイノリティの人権問題を投票によって決するということが、なぜ起き得たのか？ 一部では、長老教会が初めて組織動員で国民党に投票したとも言われている。もし、今回の公民投票の投票行動の結果に関して、クロス分析を行っているとすれば、各テーマの賛否と今回の選挙結果の相関関係はどのように言えるのか。例えば、東京オリンピック

の正名運動（「台湾」名での参加）への賛成者は、同性婚に反対した人が多かったといわれる。つまり、民進党の支持基盤である独立派の一部、たとえば南部の中老年男性などが、同性婚に反対の傾向があるということではないのか？

3. 2020 年選挙に対する質問とコメント

ここからは、2020 年に向けたプロセスに関する質問とコメントを行う。まず、2020 年の総統選挙に関して、民進党は賴清徳に換えても勝ちにくい、おそらく蔡英文が候補者として選挙戦に臨むことになるだろう。それでは、国民党は朱立倫候補に落ち着くのか？ もし、候補者の選定が朱立倫に落ち着いたとして、その後、団結することが可能だろうか？ という問題である。

アクターごとの動向を分析すると、立法院に強い影響力を有する王金平は、朱とは組まない、呉と並ぶことになり、王金平・呉敦義・韓国瑜（2024 狙い？）のコアリションが形成され、王が立法院長もしくは行政院長を狙う（？）可能性がある。王は韓国瑜や立法院内に影響力を有しているため、党内の朱への支持に対する牽制要因になるだろう。

現職の党主席で、18 年の統一地方選挙で党を勝利に導いた呉敦義は、党主席を辞任でもしない限り、総統候補の公認を得ようとするのは間違いない。民進党支持者を排除した「排緑」の民意ではなく、通常の世論調査をした場合、呉敦義が候補者となった場合に、選挙戦で有利となる民進党の支持者らが、あえて呉を支持する回答をする可能性もあり、呉敦義への支持率が世論調査で大きく挽回されるかもしれない。呉敦義は、党主席として自らに有利な世論調査の枠組みを制定し、正式な立候補となる可能性がある。この現象は、2015 年の洪秀柱の例にもあった。

漫然と勝算を持っているだけかもしれない朱立倫は、新北市長に封じ込められ、洪秀柱を直前で引きずり降ろすことになった 2015 年の混乱劇の例にもあるように、拙劣な宮廷政治の手腕によって、結局、副総統候補にさせられる可能性はないだろうか？ 結局、国民党内部の論理に基づけば、呉・朱のペアで正副総統、王金平が立法院長という組み合わせが最も団結できるが、これはまさに最も人気のない組み合わせと言えよう。

次に、2018 年選挙結果は、柯文哲にとって、「2020 年の総統選に最も出馬しにくい結果」であった。もし落選していれば、退路をたって総統選挙に出馬することになるが、当選してしまった。もし大差での当選であれば、総統選での勝算が高いので、出馬しやすくなるが、今回の選挙は 3000 票差という辛勝だった。こうした結果で、柯

文哲は本当に出馬するだろうか？ 柯にとって、今後の展開を予測する上で、以下の要素が重要となる。

(1) 「白緑合作」は非常に困難である。今回の選挙戦で傷ついた柯・蔡関係は修復不能だと考えられている。蔡英文が当選する可能性は、呉が出馬し、柯が出馬しないという場合のみである。柯が出馬しない場合は、柯が蔡を高く評価し、尊敬しているかどうかのカギとなるだろう。

(2) 柯は、「後発の優位」があるため、7 月に民進党、8 月に国民党の候補決定後に出馬するか、しないかを決められる。民進党が蔡出馬であれば、国民党としては呉の出馬でもよく、それなら柯が出馬するのも良い、という順番になる。この場合、政党政治へのアンチテーゼが柯文哲支持の民意の背景であるなら、政党は作らないだろう。

(3) 韓国瑜の出現により、2020 年の総統選挙が、柯にとって事実上最初で最後のチャンスになった。民進党と国民党の総統候補が、それぞれ「蔡・呉」であれば、この選択肢に有権者が不満を爆発させ、柯待望論が起きるため、柯にとって当選の最大チャンスである。「蔡・朱」なら、『伝説国民党』の再起阻止」を名目に「棄蔡保柯」をねらって出馬することは、柯当選の次善のチャンスと言える。もし、今回出馬せずに、2024 年まで待った場合、韓国瑜に出番が回ることになる。『史記』にも「天與弗取、反受其咎；時至不行、反受其殃」とあるように、天から与えられたチャンスを受け取らない者にはひどい結末が待っているという格言もある。そもそも 2024 年まで待つ性格の人なら、なぜ 2014 年に台北市長選挙に立候補したのか？ と考えれば、柯の出馬は十分考えられる可能性である。

(4) 親民党（宋楚瑜）、時代力量（林昶佐）など、柯文哲を支持する第 3 極の動向も注目に値する。

4. 中台関係の展望に関する質問とコメント

最後に、中台関係の展望に関する質問とコメントを行う。習の「40 周年講話」は、2 回目の「地動山揺」発言であると言えるが、「第一個一百年（2021）」を迎える中国と、蔡／新政権との関係はどうなるだろうか？ 以下に、場合分けをして若干の分析を行う。

(1) 蔡政権第 2 期目：この場合、ぎりぎりでの勝利することになり、現状維持から独立派に配慮した政権運営に向かうのではないかと。さらに、米中関係の激化を背景に、中国で主戦派が台頭して、台湾がターゲットになる可能性もあるのではないかと？

(2) 国民党の朱（呉）政権：ぎりぎりでの勝利した場合、馬政権時代の悪夢から、再選に向けて大陸政

策などで慎重な政権運営を行うだろう。もし、大差で勝利した場合、対中接近は米国からの牽制を受けつつも、大陸からの「促統」圧力にある程度応じるのでは？

(3) 柯政権: この場合、圧勝する可能性はないので、ぎりぎり勝利することになる。さらに、独立派の民進党と組むこともないので、国民党との連立政権を結ぶことになり、半大統領制下で初のコアビタシオンが生まれる。立法院では、多数政党と組むと答えることになるだろう。この場合では、「92年コンセンサス」に替わる「新共識」が生まれる可能性もあり、これに対して米国の牽制が有り得るだろう。

小笠原プリの概要:

蔡英文民進党政権への不満が津波のように結集したというのが、今回の選挙の主要な敗因である。公民投票に関して、少数者の権利を投票で決めるということがあってもいいのか、という問題は、台湾では十分議論されていない。台湾では権威主義体制の時代からの民主化などを求めた社会運動によって、公民投票への神聖視が長年かけて形成されてきたことが遠因として挙げられる。

例えば、国会議員の半減、脱原発、公民投票権の確立などを訴えて社会運動を展開し、民主化に貢献してきた林義雄氏などの主張、歴史を背景に、公民投票が非常に重要視される中で、完全執政を勝ち取った民進党が、ハードルが高すぎる「鳥籠公投」と批判されてきた制度を「改革する」という流れがあった。しかし、こうした文脈は、直接民主制と間接民主制のバランスを取るという、世界の政治学における公民投票制度に対する議論の潮流とは、若干離れたところで進んでいったと言える。

東京オリンピックの台湾「正名運動」を支持する層と、同性婚の支持者層とは若干異なっているというのは間違いないが、この部分は今後の統計分析によって明らかにしたい。

(記録者: 平井新)

第136回日本台湾学会定例研究活動内容

国際ワークショップ「中国の対台湾・香港工作—その実態と影響力」

主催: 法政大学現代法研究所

共催: 財団法人日本台湾交流協会・共同研究助成事業、科学研究費補助金・若手B (課題番号15K17006)

日時: 2019年1月26日(土) 14:00-17:30

場所: 法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナードタワー26階スカイホール

モデレーター: 森聡 (法政大学)

参加人数: 60名

<プログラム>

第一部: 中国のインド太平洋地域における影響力—最前線としての香港

報告: 方志恒 (香港・香港教育大学)

題目: 「中国のインド・太平洋地域における影響力の分析モデル」

報告: 張廖年仲 (台湾・中央研究院)

題目: 「中国の対香港統一戦線工作」

報告: 倉田徹 (立教大学)

題目: 「中国のシャープ・パワーと香港」

討論: 森聡 (法政大学)、福田円 (法政大学)

第二部 中国の対台湾統一戦線工作—歴史と現状

報告: 鍾延麟 (台湾・政治大学)

題目: 「中国共産党の統一戦線工作史」

報告: 蔡文軒 (台湾・中央研究院)

題目: 「中国の対台湾統一戦線工作—台湾選挙の操作を事例として」

討論: 松田康博 (東京大学)、熊倉潤 (アジア経済研究所)

活動報告:

本ワークショップは、中国の対香港・台湾工作の実態に迫った上で、それらが香港、台湾、そしてインド太平洋地域のガバナンスやアイデンティティに与える影響について議論することを目的としていた。

まず、冒頭に主催者を代表して福田が本ワークショップの趣旨説明を行った。近年、中国の「シャープ・パワー」が国際秩序や地域秩序に与える影響が注目を集めているが、香港や台湾は「統一戦線工作」というかたちで、以前より中国による「シャープ・パワー」の最前線に立たされてきた地域であり、近年それらの影響力はさらに増大しつつあることを紹介した。こうした現実を反映して、香港や台湾におよぶ中国の影響力の実態やそのメカニズムに関する研究は進展しているが、中国共産党がどのような認識やビジョンの下で影響力を行使しようとしているのかに関する政治学的研究や、こうした現象を国際政治学的にどのように捉えるのかという研究にはさらなる発展の余地があるという問題意識が紹介された。

第一部では、中国の対香港工作について議論を行った。まず、方志恒は中国のインド・太平洋地域に対する影響力の浸透と現地の反応を立体的に

捉えるための「同心円のモデル」を提示した上で、同心円の中心である中国に最も近い香港の現状がどのような意味を持つのかを説明した。続いて、張廖年仲は歴史的な視点から、返還以前の香港に対する中国の統一戦線工作の論理と特徴をまとめ、手法は一貫しつつもその対象が変遷してきたことを説明した。最後に、倉田徹が近年の中国の対香港世論工作の事例として銅羅灣書店事件を取り上げ、その手法や広がり方の特徴を論じた。

これに対して、討論者から、報告相互の関連を問うという意味で、方報告が示したモデルの詳細および香港と国際社会の関係の強度、張廖報告が示した統一戦線工作の経緯を返還後に演繹した場合の見通し、倉田報告に示されたような世論工作を統一戦線工作の一部と考えることが妥当かどうかなどの質問がなされた。

第二部では、中国の対台湾工作について、特定のテーマに焦点を当てた報告がなされた。まず、鍾延麟は彭真という指導者の役割に焦点をあてて、共産党の対台湾統一戦線工作史を振り返った。次に、蔡文軒が今日の共産党の対台湾工作について、台湾メディアの操作やフェイク・ニュースにより、台湾の選挙にいかなる影響を与えようとしているのかを論じた。

これらの報告に対して、討論者からは、中国の統一戦線工作全体における対台湾工作の特殊性や、「統一戦線工作」の元々の概念や現代中国における変遷に関する指摘がなされた上で、彭真という指導者に焦点を当てる意味はどこにあるのか、台湾におけるフェイク・ニュースの流布、共産党の関与、選挙結果という3つの事象の間の因果関係をどのような情報や資料によって裏付けることができるかなどについて、具体的な議論が行われた。

本ワークショップは土曜日の午後に開催され、しかも台湾学会の定例研究会としては、第135回定例研究会の翌日に開催されたため、どの程度の参加者となるか不安であったが、会場には60名を超える参加者があり、主催者や登壇者は本テーマに関心を持つ参加者がこれだけいたことに大いに勇気付けられた。また、第一部でも、第二部でも、討論者によるコメントの他にも、フロアから多くの挙手があり、フロアと登壇者の間でも対話を展開することができた。

企画・主催者としては、登壇者の間で「対香港・台湾工作」、「統一戦線工作」、「シャープ・パワー」などの各報告の核となる概念について、厳密な共有を行っていなかったため、やや議論が拡散してしまったことは、大きな反省点となった。このような反省点と、ワークショップで交わされた議論、後日諸会員からいただいたコメントなどを生かし

て、本テーマについては引き続き香港、台湾の研究者との共同研究を続けてみたいと考えている。

(記録者：福田円)

第137回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：東京大学東洋文化研究所、科研基盤A（代表：松田康博）

日時：2019年1月29日（火）18:00～19:30

場所：東京大学東洋文化研究所 3F 大会議室

題目：中美貿易摩擦对中国大陆台商企业发展影响评估及应对（米中貿易摩擦が中国大陆にある台湾系企業の発展に与える影響の予測と対応）

司会：松田康博（東京大学）

報告：伍湘陵（寧波大学）

コメンテーター：佐藤幸人（アジア経済研究所）

参加人数：10名

活動報告：

2019年1月29日（火）、訪問研究員として来所中の伍湘陵・寧波大学商学院講師をお迎えして、日本台湾学会定例研究会および科学研究費基盤A「対中依存構造化と中台のナショナリズム—ポスト馬英九期台湾の国際政治学」（代表：松田康博）との共催による「米中貿易摩擦が中国大陆にある台湾系企業の発展に与える影響の予測と対応（中美貿易摩擦对中国大陆台商企业发展影响评估及应对）」と題する東文研セミナーが開催された。

伍湘陵氏は、2018年から拡大し続ける米中間の貿易をめぐる対立を、相手を徹底的に潰す戦争ではないとして、摩擦と定義し、経済貿易という視点で分析を展開した。台商（台湾出身の企業、ビジネスマン）は2000年代から中国大陆での投資を拡大し、馬英九政権期に金額のピークを迎え、中国大陆への投資金額と規模もほかの国へのよりも多い。そのため、中国大陆とのサプライチェーンを形成している台湾のIT産業は米国による関税引き上げから最も強い衝撃を受けている。

ただし、台商は大陸における巨大な市場と成熟したサプライチェーンに引き寄せられたため、電力供給をはじめ投資環境が改善されていない台湾に戻ろうとしない。台湾の民衆が大陸で投資、就学、就業や起業した際に優遇を与える、大陸の企業や民衆と同等の待遇を得られるとする31項目の措置（恵台31条）の発表によって、台商も「シルクロード経済ベルトと21世紀海洋シルクロード（一帯一路）」などの国家主要プロジェクトに参画しやすくなった。

また、コメンテーターの佐藤幸人・アジア経済研究所新領域研究センター長、伊藤信悟・国際経

済研究所主席研究員のコメント、質問に対し、伍氏は、米国が知財と安全保障などを理由として行った中国通信大手の華為技術（ファーウェイ）と中興通迅（ZTE）への制裁は政治的な目的によるものであると分析している。さらに、これまで大陸で投資した多くの台商が労働集約型産業であるため、米中貿易摩擦だけではなく、大陸の投資環境おとびグローバル化の変化の流れに対応するために、資本・技術集約型産業などへ転換すべきであるとも指摘した。約 10 名の参加者があり、活発な議論が展開された。

（記録者：黄偉修）

定例研究会 関西西部会研究大会

担当理事：澤井律之（京都光華女子大学）

第 16 回関西西部会研究大会が昨年 12 月 15 日に京都光華女子大学において開催された。プログラムは以下のとおり。

1. 齋藤幸代（関西学院大学大学院）
台湾の母語教育における現状と課題
—台湾「本土言語教育」と「新移民（新住民）諸語」の事例より
評論：山本和行（天理大学）
2. 根岸忠（高知県立大学）
台湾における外国人労働者をめぐる法規制
—近年の法政策の検討をとおして
評論：田上智宜（桃山学院大学）
3. 小林善帆（追手門学院大学）
台湾といけ花—その連続と非連続
評論：今井孝司（帝塚山大学・小原流家元一級教授）
4. 若松大祐（常葉大学）
官製歴史叙述としての台湾島四百年史
評論：劉梅玲（龍谷大学）
5. 近藤伸二（追手門学院大学）
台湾の民主化における「彭明敏事件」の役割再考
評論：松本充豊（京都女子大学）

齋藤論文は「母語教育」の観点から台湾における言語教育政策を論じている。台湾では国民小学校 6 年、国民中学 3 年、高級中学 3 年が義務教育である。2019 年度から 12 年一貫教育の中に「本土言語教育」が義務付けられる。生徒は「閩南語・客家語・原住民語・新住民語」の中から選択して学習しなければならない。齋藤氏はこうした政策が逆に「他民族・多言語の共生が崩れる要因にもなりかねない」と結んでいる。この教育政策がどう展開していくのか、また台湾社会にどのような影響をもたらすのか、齋藤氏の今後の研究が期待される。

根岸論文は法制度の面から台湾における外国人労働者の問題を論じている。台湾では 1990 年代からインドネシア・ベトナム・フィリピン・タイなどの国から「産業外籍労工（製造、建設、船員）」と「社福外籍労工（介護、家事）」を受け入れてきた。根岸氏はこれらの労働者が法律によって保護されながら合法的に滞在していることを調査によ

って説明している。今後どうなるのか。根岸氏はまだ増えるだろうが、今後労働条件がよい地域があればシフトしていく可能性もあると述べる。

小林氏は台湾、韓国のいけ花を研究している。日本統治下の女子教育の場にいけ花が導入された。台湾や韓国には現在もいけ花を愛好する人々がいる。小林氏は、池坊や小原流に属する 10 名ほどの女性にインタビューし、実は戦後日本人女性からいけ花を習得したケースが多いことを明らかにしている。

若松論文は、2000 年から 2008 年まで中華民国総統であった陳水扁の公式談話をもとに、陳がいかにして「台湾（≠中華民国）が主権国家として台湾を統治する正当性を基礎づけようと試みたか」を論じている。その根本は「民主」であり、その内容は「多元性」「憲法改正」「台湾主体意識」であった。若松氏は「ただし、台湾統治の正当化を主張するに際して、陳水扁は米中を説得できる説明を準備できなかった」とする。陳水扁の後、馬英九、蔡英文の時代はどうなったのか、聞いてみたい。

近藤論文は、彭明敏事件を取りあげている。1964 年台湾大学教授だった彭明敏が教え子の謝聰敏、魏廷朝とともに「台湾人民自救運動宣言」を印刷し、反乱罪容疑で逮捕された。その後、彭は特赦で出獄するが、監視のもとにおかれ、ひそかにスウェーデンに出国し、ミシガン大学に招聘される。近藤氏は彭明敏にインタビューし、事件のディテールをつぶさに論じた。

今世紀に入って台湾研究を始めた研究者が多くなり、李登輝以前に研究を始めた私のような世代からすると、研究の内容や手法に斬新さを覚える。台湾は変化しつづけているし、研究も変わっていくものだとの認識を深めた。

参加者数は 19 名であった。西京極駅前居酒屋「ぼっさ」で懇親会をもった。12 名が残り、台湾をめぐり、話題はつきなかった。

定例研究会

台北

担当理事：富田哲（台湾・淡江大学）

第 81 回台北定例研究会

日時：2018 年 12 月 1 日（土）15:00

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：野口真広（早稲田大学 ORIS 招聘研究員 / JSPS 海外特別研究員、中央研究院台湾史研究所訪問学人）

テーマ：植民地台湾の自治指導者としての楊肇嘉に見る憲政理解—蔵書の分析を中心に

コメンテーター：駒込武（京都大学大学院教育学研究科・教育学部、台湾師範大学台湾史研究所客座教授）

使用言語：日本語

第 82 回台北定例研究会

日時：2019 年 1 月 5 日（土）15:00

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：藤井康子（清華大学外国語文学系、天主教輔仁大学日本語文学系）

テーマ：1930 年代台湾東部における中学校の誕生

使用言語：日本語

学会運営関連報告

担当理事：星名宏修（一橋大学）

第10期理事会

第5回常任理事会 議事録（抄）

日時：2018年12月8日（土）13：00—17：50

場所：東京大学東洋文化研究所3階第1会議室

出席：川上桃子、北波道子、洪郁如、佐藤幸人、
星名宏修、松田康博、三澤真美恵、山崎直也（以
上常任理事）、宮岡真央子（第21回学術大会実
行委員長）

スカイプ参加：富田哲

欠席：大東和重、上水流久彦

議長：三澤真美恵

書記：家永真幸

報告

1. 理事長・事務局

（1）三澤理事長

三澤理事長より、去る11月20日の台湾協会訪
問について報告された。

（2）星名総務担当理事

特になし。

2. 各業務担当

（1）星名総務担当理事

星名理事より、理事選挙の方法について報告さ
れた。

（2）北波会計財務担当理事

北波理事より、大会会計の処理が終了したこと
等が報告された。

（3）佐藤理事（上水流編集委員長代理）

佐藤理事より、欠席の上水流理事に代わり、日
本台湾学会報第21号の編集状況について報告さ
れた。

（4）川上企画委員長

川上理事より、企画募集が締め切られたことが
報告された。

（5）山崎広報担当理事

山崎理事より、JATS Mail Newsの配信状況等につ
いて報告された。あわせて、欠席の大東理事に
代わり、ニュースレター36号の編集状況について
報告された。

（6）洪目録担当理事

洪理事より、2018年12月4日現在、総レコー
ド数は16524件、12月末に10—12月分の文献目
録を交流協会に送ることが報告された。

（7）松田国際交流担当理事

松田理事より、9月6日から8日にかけて台北
にて開催された世界台湾研究大会への、本学会と
しての参加について、報告された。

（8）北波関西西部会担当理事

北波理事より、関西西部会の大会が来週、京都光
華女子大で開催されることが報告された。

3. その他

なし。

議題

1. 第21回学術大会について

（1）分科会企画・自由論題報告について（川上）

川上理事より、配布資料に基づき、次回大会の
分科会企画・自由論題の採用状況について報告さ
れた。構成を2部とするか3部とするかについて
は継続審議となった。

（2）会場校の準備状況について（宮岡）

宮岡大会実行委員長より、配布資料に基づき、
大会準備状況について報告された。提案どおり進
めることが承認された。

（3）大会予算案について（宮岡）

宮岡実行委員長より、配布資料に基づき、大会
予算案について報告された。通訳・翻訳謝金等につ
いては再検討した上で、適宜修正して進めるこ
ととなった。

2. 学会賞について（星名）

星名理事より、学会賞選考手続きについて確認
された。審議の結果、原則として従来どおりの手
続きで選考を行ってもらおう、山口選考委員長
に回答することが決議された。

3. 会員の入退会について（星名）

星名理事より、8名の入会申請書類が回覧に付
され、審議の結果8名の入会が承認された。あわ
せて、3名の退会が報告された。

入会8名：

山根直生／張彩薇／河村憲子／島田有紗／館山優
佳／村上優／ナンタ・アルノ／大川謙作
退会3名：
陳萱／田中（橋本）梓都美／野村幸一郎

4. 長期会費未納者の扱いについて（星名）

星名理事より、長期会費未納者の扱いについて審議に付された。理事選挙の選挙権、被選挙権との関連を中心に審議が行われ、「会員資格停止」として名簿から外す場合の要件が改めて確認された。

5. 次回の常任理事会の日程について（星名）

3月1日（金）13時より、関西大学東京センターにて開催することに決定した。

6. 「シニア会員／名誉会員」制度に関する提案（松田）

松田理事より、配布資料に基づき、「シニア会員／名誉会員」制度創設案について審議に付された。常任理事の修正意見を反映させ、松田理事が修正案を作成し審議を継続することとなった。

7. 台湾文学学会との協力協定に関する提案（松田）

松田理事より、配布資料に基づき、台湾文学学会との協力協定について、理事会および総会にかけの文案が審議された。常任理事の修正意見を反映させ、松田理事が修正案を作成し審議を継続することとなった。

8. その他

Skype 参加の常任理事のため、次回以降、各報告者は当日配布資料を必ず事前に ML で送ることとした。

以上

***** 編集後記 *****

・本号は特集「台湾研究 この1冊」としてお届けします。本や資料であふれた部屋を整理していると、懐かしい1冊が、記憶とともに「発掘」される経験は、研究者が共通して持つものと思います。この道へと誘ってくれた1冊、何気ない出会いがのちに大きな意味を持った1冊、座右に置かれた指針の1冊、人生のライバルと決めた1冊、折に触れて読み返す1冊、大切な人からもらった1冊…。会員の皆様にも忘れがたい1冊がおりかと思ひます。そういえばあの本、どこにやっただろうと、皆様が本棚を見なおすきっかけになればと願ひつつ、本号を編集いたしました。

・ニュースレターは会員による情報交換の場でもあります。台湾と関わるシンポジウム・研究会・展示等の参加記や、学術交流の動向など、積極的なご投稿をお願い申し上げます。

（大東和重）

日本台湾学会ニュースレター 第36号

発行：日本台湾学会（代表 三澤真美恵）

発行年月：2019年4月

■日本台湾学会事務局

〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉3-2-2

アジア経済研究所 佐藤幸人研究室気付

E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

■ニュースレター発行事務局

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

関西学院大学法学部 大東和重研究室気付

E-mail: kaohigashi@kwansei.ac.jp